

26 『彼女は雨の音がする』 成井豊＋真柴あずき

○ジャンル／ファンタジー

○ストーリー／小説家志望の白浜若菜のもとに、ゴーストライターの仕事が無い込んでくる。それは、大企業を経営する浦神信雄という男の自伝だった。若菜は浦神を知っていた。若菜の母の元恋人で、結婚の約束をしておきながら、一方的に捨てたのだ。若菜は浦神の真の姿を暴いてやろうと、その仕事を引き受ける。ところが、浦神の屋敷へ行ってみると、彼は広大な庭を走り回り、発声練習をしていた。その姿は60代とは思えないほど若々しかった。浦神は若菜に、俳優になりたいと言った……。

○出演者／男6＋女6 計12
○上演時間／120分

登場人物

白浜若菜	(作家)
有田恒彦	(俳優)
浦神信雄	(ホテルチェーン社長)
岩代旭	(編集者)
白浜邦子	(若菜の母・司書)
湯浅洋恵	(邦子の妹・シェフ)
湯浅日出男	(洋恵の夫・サラリーマン)
湯浅勝	(洋恵の息子・大学生)
浦神仁一	(信雄の息子・秘書)
浦神優花	(仁一の妻)
道成寺澄子	(執事)

箕島香月
(メイド)

二〇一六年九月一日昼、映画のスタジオ。スタジオ前の廊下。白浜若菜と岩代旭が話している。

1

岩代 あー、もう、わかったよ。俺が何を言おうと、おまえの気持ちは変わらない

若菜 んだな？

岩代 そういうこと。

若菜 だったら、俺ももう口出ししない。おまえの気が済むようにすればいい。

岩代 ありがとう、旭くん。

若菜 礼なんか言われる覚えはない。

岩代 でも、あなたがいないなかったら、私はきっと途中で挫折してた。原稿が書き上

若菜 があったら、読んでくれる？

岩代 当たり前だ。誰よりも先に読ませろ。ガンガンダメ出ししてやる。

若菜 お願います。じゃ、私はスタジオへ行くね。

岩代 何？

若菜 困ったことがあったら、いつでも電話しろよ。相談に乗るから。

岩代 うん。

若菜 俺はおまえの幸せを願ってる。誰よりも。それだけは忘れないでくれ。

岩代

若菜
岩代

ありがとうございます。
じゃあな。

岩代が去る。そこへ、有田恒彦がやってくる。

有田

お疲れ様です。

若菜

あの、すみません。今、中に入っても大丈夫でしょうか？

有田

(若菜を見つめる)

若菜

本番中ですか？ だったら、キリのいいところまで待ちますけど。

有田

(若菜を見つめる)

若菜

あの、どうかしましたか？

有田

いや、えーと、何の話でしたっけ？

若菜

スタジオに入っても大丈夫かどうか聞いたんです。

有田

ああ、大丈夫ですよ。ワンシーン撮り終わって、次の準備をしているところだから。

若菜

ありがとうございます。(行こうとする)

有田

あの、お会いするのは初めてですよね？

若菜

だと思えますけど。

有田

出演者の方ですか？

若菜

いいえ、違います。個人的に、この映画に出るはずだった人の取材をしてて。

有田

出るはずだった人？ それって、浦神さんですか？

若菜

そうです。浦神信雄さんです。

有田

僕は有田恒彦と言います。浦神さんの代わりに、小野田をやることになりま

有田

僕は有田恒彦と言います。浦神さんの代わりに、小野田をやることになりま

若菜
有田

若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田

した。
そうですね。あなたが。

串本監督から、とてもいい役者さんだったと聞きました。それに比べて、僕はただの素人です。演技の経験はありません。でも、浦神さんを目標にして、全力を尽くすつもりです。

ぜひそうしてください。お願いします。

あの、僕に会うのは本当に初めてですか？

さっきもそう言ったはずですけど。

でも、あなたの顔には見覚えがある。どこかで会ったような気がするんです。

それはあなたの勘違いですよ。

そうだ。まだ、名前を聞いてなかった。教えてもらえませんか？

聞いてどうするんですか？

何か思い出せるかもしれない。お願いします。

白浜です。白浜若菜。

若菜、若菜。

あの、撮影の方はいいんですか？

僕の出番はもう終わりましたから。若菜、若菜。クソー、何も思い出せない。

もつとヒントをくれないかな？ 家族構成とか、住んでる場所とか。

何を聞いても同じですよ。真正銘、今日が初対面なんですから。

それは君が忘れているだけかもしれない。だから、頼む。

私は無駄だと思えますけど。

無駄じゃない。玉子の殻を割らなければ、目玉焼きは食べられない。そうだと

思う？

若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田

え？

えーと、つまり、やってみなくちゃわからないってこと。

もう一回、言つて。

やってみなくちゃわからない。

その前。

玉子の殻を割らなければ、目玉焼きは食べられない。

その言葉、誰から聞いたの？

誰からでもない。僕のモットーみたいなもので。

本当に？

いや、何かの本で読んだのかもしれないけど、よく覚えてない。

有田さん。あなたに聞いてほしい話があるの。とつても長い話なんだけど。

もちろん聞くよ。隣のスタジオへ行こう。そこで、コーヒーでも飲みながら。

若菜と有田が歩き出す。登場人物たちが現れて、二人とすれ違う。雨が降ってくる。二人が屋根の下に駆け込む。二人が話し始める。登場人物たちが、二人を見つめる。やがて、若菜と有田が歩き出す。登場人物たちも歩き出す。去る。

九月一日昼、スタジオオ。若菜が周囲を見回している。有田がやってくる。コーヒーの入った紙コップを二つ持っている。

有田 お待たせ。(と紙コップを差し出す) 自販機のコーヒーで悪いけど。

若菜 (受け取って) ありがとう。勝手に入っちゃって大丈夫なの？

有田 夕方まで、僕が借りることになってるんだ。このスタジオ、撮影所で一番古くて、もうすぐ作り直すんだって。それまでの間、自主稽古に使えるように、監督が手配してくれて。

若菜 じゃ、これから一人で稽古？ 撮影もあつたのにな？

有田 いくら稽古をしても足りないぐらいだから。それより、さっき、個人的な取材って言ったよね。あれは、どういう意味？

若菜 始まりは、一カ月前。私は新宿の喫茶店に呼び出されて。

① 八月一日夕、喫茶店。岩代が椅子に座っている。

岩代 若菜、どこ見てんだよ。こっちこっち！

若菜 (歩み寄って) 大声で呼ばないでよ、恥ずかしい。

岩代 恥ずかしがるような年かよ。いいから座れ。

有田 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜

(若菜に)この人は?

岩代旭。緊張社って出版社で、編集の仕事をしてる。

(鞆から雑誌を取り出して)読んだよ、「ジュゴン」の恋愛特集。どうだった、私のコラム。

文章に破綻はなかったし、最後まで飽きずに読めた。ただ。

ただ、何?

なんていうか、熱が足りないんだよな。恋愛がテーマのクセに、恋愛に対して距離を感じる。

そうかな。私なりに、力を入れて書いたつもりだけど。

ちよつと待って。白浜さんは、作家なのか?

まだ作家だなんて言えない。たまに雑誌に、コラムや記事を書いているだけで。でも、それで生活してるんだよね?

まさか。週に四日は、パン屋でアルバイトをしてる。

パン屋か。いいね。僕、焼きたてのパンの匂いが大好きなんだよ。

大体、若菜の文章は上品過ぎるんだよな。キレイにまとまっているだけで、印象に残らない。たまにはぶっ飛んだテーマで書いてみたらどうだ。

文句を言うために、わざわざ呼び出したの?

とんでもない。今日は、仕事を持ってきたんだ。とてつもなくデカイ仕事を。デカイ仕事?

浦神信雄って知ってるか?

当たり前じゃない。プリンセスホテルの社長でしょう?

その浦神さんが今度、自伝を出すことになってさ。なんとうちの会社が、企画から出版まで、丸ごと任されたんだ。

若菜 若菜 岩代 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜 若菜

それで？

聞いて驚くなよ。その自伝を、若菜に書いてほしいんだ。ギャラは最低でも

百万。売れば売れるだけ、上乘せされる。

驚いた。

だろう？ こんなチャンス、なかなかないもんな。

何がチャンスよ。自伝を書け？ つまり、ゴーストライターをやれってこと

でしよう？

まあ、平たく言えばそうなるな。

私書きたいのは小説だよ。会ったこともないおじいちゃんの人生なんか興

味ない。

おじいちゃんはひどいな。浦神さんはまだ六十だぞ。

あなた、それでも編集者？ 作家になろうって人の気持ちがわからないの？

落ち着けよ。仕事だつて割り切ればいいじゃないか。(雑誌を示して) この

コラムだつて、そうやって書いたんだろう？

一緒にしないで。それには、ちゃんと私の名前が出てくるもの。

じゃ、いつ、おまえの書いた小説が本になるんだ？ 教えてくれよ。

それはまだわからない。でも、もしかしたら近いうちに。

何だよ、近いうちつて。

実は私、遊泳社の新人賞に応募したの。今、最終選考まで残ってる。

そうなのか？ そんな話は聞いてないぞ。(と携帯電話を取り出して操作)

結果がわかってから話そうと思つて。

(携帯を操作しながら) 遊泳社なら、受賞作がそのまま単行本になるんだよ

な。(画面を見て) 本当だ。ちゃんとサイトに若菜の名前が載ってる。すご

いじゃないか。

発表は来週。決まったら電話をもらうことになってる。

なるほどな。デビューできるかもしれないって時に、ゴーストなんかやって

られないわけだ。

勘違いしないで。どんな時だろうと、ゴーストはやらない。

どんなにギャラがよくてもか？

バカにしないで。お金の問題じゃないの。

若菜が歩き出す。岩代が去る。

有田 なるほど。取材っていうのは、自伝を書くためだったんだ。あれ？ でも、

今、断ってなかったか？

事情が変わったの。それから一週間後に。

わかった。新人賞を取ったんだ。

順番に話すから、黙って聞いてくれる？

わかった。静かにしてる。

② 八月七日夕、若菜の家。白浜邦子がやってくる。

邦子 お帰り、若菜。遅かったのね。

若菜 バイトの帰りに、本屋に寄ってたから。

邦子 旭くんが待ってるわよ。あなたに話があるって。

岩代がやってくる。

岩代

有田

若菜

有田

邦子

邦子

邦子

どこ行ってたんだよ。先にメシ食っちゃったぞ。

え？この人、白浜さんとどういう関係なんだ？

同じ年で、家が近所で、母親同士の仲がよくて。

幼なじみってヤツか。それにしても凶々しいな。

旭くん、紅茶でいい？

お構いなく。話が済んだら帰りますから。

私が飲みたいのよ。ちよつと待ってて。

邦子が去る。

若菜

岩代

若菜

岩代

若菜

岩代

若菜

岩代

若菜

岩代

有田

（岩代に）何の用？

今日、サイトで見たよ。遊泳賞の発表。

ざまあ見ろって思ってるんでしよう？ 偉そうなこと言っておいて、結局、

落ちたじゃないかって。

そんなことは思っていない。

じゃ、何？ 慰めたりしたら、ぶん殴るからね。

この前の話、考え直さなにか。

ゴーストなら断ったはずだよ。

贅沢を言ってる場合か？ 文章を書いて金がもらえるんだぞ。パン屋なんか

で働かなくても済むだけの金が。

パン屋をバカにするな。どれだけ大変な仕事かわかってるのか？

若菜 すごい。私も同じことを言ったの。有田さんもパン屋で働いたことあるの？
有田 いや、一度もないけど。

若菜 (若菜に) バカにしてるのはおまえの方だろう。ゴーストなんか、誰にでも
できる。私がやるほどの仕事じゃないって。

若菜 そんなこと言っていない。

若菜 だったら、やってみろよ。違った手法で書くのは、絶対に勉強になるから。

若菜 余計なお世話よ。

若菜 じゃ、聞くけど、遊泳社の編集に、おまえの担当になるってヤツはいたか？

若菜 デビューできるまで面倒を見るってヤツは。

若菜 いなかったら何なの？ 最終選考に残ったぐらいで浮かれるなって言いたい

若菜 わけ？ おまえには才能がない、ゴーストぐらいがちょうどいいって？

若菜 ほら見ろ。やつぱりバカにしてるんじゃないか。

若菜 あなたに何がわかるのよ！

邦子 邦子がやってくる。マグカップとシュガーポットを載せたお盆を持っている。

邦子 どうしたの、大きな声を出して。

邦子 何でもない。

邦子 おばさんから言っていてやってくださいよ。仕事を選び好みするなって。

邦子 (カップを置きながら) 仕事って？ 旭くんが若菜の面倒を見てくれるの？

邦子 やめてよ。自分の面倒ぐらい、自分で見られる。

邦子 浦神さんに興味がないって言ったよな？ 小説っていうのは、人間を書くも

邦子 のだろう？ あれだけの人物に興味を持ってないなんておかしくないか？

邦子 岩代 若菜 邦子 岩代 若菜 邦子 岩代 若菜 邦子 岩代 若菜 邦子 岩代 若菜 邦子 岩代 若菜

（手を止めて）浦神さんって？

おばさんも、もちろん知ってますよね？ プリンセスホテルの浦神信雄です

よ。今度、うちの会社から、浦神さんの自伝を出すことになって。

ちよつと。仕事の話を、外でベラベラ喋っちゃっていいの？

いいんだよ、おばさんは家族も同然なんだから。（邦子に）ねえ、おばさん。

え？ ごめん、聞いてなかった。

どうかしたの？ 何だか具合が悪そう。

ううん、ちよつと驚いただけ。急に知ってる名前が出てきたから。

知ってる名前って。もしかして、おばさん、浦神さんと知り合いなんですか？

まさか。違うよね、お母さん。

昔の話よ。もう何十年も会ってない。

嘘。本当に知り合いだったの？ 私、初耳だよ。

だって、うんと昔だもの。あなたが生まれるより、ずっと前。

じゃ、まだ独身の頃ですか？ もしかして、元カレなんてことは。

何言ってるの？ そんなわけないでしょう？

結婚する前に、彼氏の一人や二人、いたっておかしくないだろ。お袋が言っ

てたぞ。おばさん、若い頃は美人だったって。いや、今でもキレイだけどさ。

ありがとう、気を使ってくれて。私のことはいいから、仕事の話が続けて。

でも、まだ何も聞いてない。浦神さんとは、どう関係だったの？

やめる、若菜。おばさんにとっては、忘れてしまいたい過去なんだ。（邦子

に）違いますか？

どうしてそう思うの？

浦神さんの評判は聞いてますよ。経営者としては一流だけど、傲慢かつ冷徹。

若菜 岩代 若菜 岩代 邦子 岩代 邦子 若菜 邦子 若菜 岩代 邦子 若菜

バブルが弾けた後の、徹底的なリストラは有名です。身内だろうが、古くからの社員だろうが、容赦なく切り捨てた。それ以来、ホテル業界では、帝王

と呼ばれてるそうです。

もしかして、お母さんも捨てられたの？

やめろって。傷口に塩を塗り込むな。

あら、私は平気よ。もう三十年以上、昔のことだから。(若菜に) そんなこ

とより、あなたは、どうしても断るつもりなの？

こいつ、ビビってるんですよ。失敗するのが怖いんです。

全然違う。ゴーストだからやりたくないの。何度言ったらわかるのよ。

ねえ、若菜。一度、浦神さんに会ってみたら？

どうして？ まさか、未練があるわけ？

そうじゃなくて、話も聞かずに断るなんて失礼でしょう。この仕事をやるこ

とが、勉強になるかもしれないし。

その通り。

(若菜に) 賞を取れなかったのは、多分、何か足りなかったからじゃない

かな。新しいことに挑戦してみたら、その何かが見つかるかもしれないよ。

おばさん、すごい。それこそ、俺の言いたかったことです。

わかった。会うだけ会ってみる。

よし、決まりだな。後で、浦神さんの経歴書と会社の資料、メールで送る。

明日までに目を通してくれ。

明日？

会いに行くんだよ、浦神さんに。もうアポは取ってあるから。

わかった。

岩代
若菜

覚悟を決めとけよ。今までに二人、候補者がクビになってるんだからな。
そんな話、聞いてない。
言っただけからな。

岩代・邦子が去る。

有田 勝手な男だな。最初から、君にウンと言わせるつもりだったんだ。
 若菜 お母さんと話してなかったら、断ってたけどね。
 有田 なるほど。お母さんに説得されて、やる気になったんだね？
 若菜 私はただ、確かめたかっただけ。お母さんを捨てた男が、どんなヤツなのか。

八月八日夕、浦神信雄の屋敷、玄關。岩代・道成寺澄子がやってくる。

道成寺

お約束は六時のはずでしたが。

岩代

すみません。浦神さんをお待たせするわけには行かないと思って、少し早め

道成寺

に出たら、少し早めに着いちゃいました。

道成寺

昔から、よそのお宅を訪問する際は、約束の時間に三分遅れて行けと申しま

岩代

す。そのお宅の準備が間に合わない場合を考えて。

道成寺

それはつまり、出直してこいと？

道成寺

ご心配なく。私共の準備は完璧に整っています。こちらへどうぞ。

岩代・道成寺が去る。若菜も歩き出すが、すぐに立ち止まり、後ろを振り返る。

有田

この人、執事？ 凄いい威圧感だな。（若菜に）どうかした？ 何か気になる

若菜　　ことがあつたのか？
有田　　何となく、誰かに見られてるような気がして。すぐ近くで。
若菜　　え？ それって怖い話？ やめてほしいな。僕、そういう話、苦手なんだ。
有田　　（歩き出す）
ちよつと待って。一人にしないで。

応接室。
若菜・岩代・箕島香月がやってくる。箕島はカップを載せたお盆を持っている。

箕島　　お茶をお持ちしました。

岩代　　ありがとうございます。お手伝いしますよ。

箕島　　お気持ちだけで結構です。これは私の仕事ですから。

岩代　　遠慮は無用です。僕は学生時代、喫茶店でアルバイトしてたんですよ。

箕島　　そこまでおっしゃるなら、仕方ないですね。（台拭きを差し出して）テーブル

岩代　　を拭いてください。

有田　　あ、はい。

若菜　　何だ、この家。メイドにまで妙な威圧感が。

有田　　ここには、偉い人たちも出入りするみたい。国会議員とか、経済界の大物と

若菜　　か。だから、格式を大事にしてるんだと思う。

有田　　それにしたって、やけに空気が重くないか？　　何かが出そうっていうか。

若菜　　何かって？

有田　　たとえば、肖像画のおじいさんとずっと目が合ったり、二階なのに窓の外を

若菜　　おじいさんが歩いてたり。やめてくれよ、トイレに行けなくなる。

若菜　　自分で言い出したんでしょう？

そこへ、浦神仁一・優花がやってくる。

仁一

（若菜・岩代に）お待たせして、申し訳ありませんね。父はまもなくこちらに来ると思います。僕は息子の浦神仁一。会社では、父の秘書をつとめています。こちらは僕の妻の優花です。

優花

（若菜・岩代に）初めまして。

仁一

箕島さん、僕らにもお茶を。

箕島

はい、ただいま。

箕島が去る。仁一・優花が椅子に座る。

岩代

（仁一に、名刺を差し出して）申し遅れました。私、緊張社の岩代です。こちらは、フリーライターの――

仁一

今日は、下里部長はいらっしゃらないんですか。

岩代

下里は、違う企画に移りまして。今後は私が担当させていただきますことになりました。で、こちらが――

仁一

参ったな。僕らは、顔も見たくないほど嫌われたというわけですか。

優花

仕方ないでしょう。あんな仕打ちを受けたんだもの。

岩代

あんな仕打ちというのは。

仁一

父が、二人目の方までクビにしたことです。岩代さんもご存じでしょう。

優花

（岩代に）私たちが、下里さんに一言、お詫びを申し上げたかったですけど。

岩代

そんな、お詫びなんて。下里の話では、こちらの人選に問題があったと。

仁一

優花

仁一

若菜

仁一

仁一が若菜のカップを持ち上げようとするが、手が震えて倒してしまふ。

優花

仁一

優花

岩代

仁一

若菜

仁一

若菜

それは違いますよ、岩代さん。問題は父にこそあるんです。最初の方だって、僕から見れば優秀でした。しかし、父は、昔から独断専行の男でしてね。相手の言動が少しでも気に障ると、即刻、排除する。まるで蠅を追い払うみたいに。いや、追い払うだけじゃない。完膚無きまでに叩き潰すんだ。

仁一さん、言葉が過ぎるんじゃない？ お客様の前なのよ。

ああ、失礼。(若菜に) ええと、あなたが新しい候補の方ですか。

白浜若菜です。よろしくお願いします。紅茶が冷めたんじゃないですか。入れ替えてきましょう。

もう、何やってるのよ、仁一さん。

ごめん。(若菜に) 大丈夫ですか、白浜さん。

(若菜に) ごめんなさいね。この人、ちよつと疲れが溜まってるみたいで。

浦神さんの秘書ともなると、相当、お忙しいんでしょうね。

雑用ばかりですよ。父は文章を書くのが大嫌いでした。手紙もメールもス

ピーチの原稿も、みんな僕が書いてるんです。

そうなんですか。自伝も仁一さんに任せるといふ話はなかったんですか？

バカな。僕にそんな文才はありません。父が言うことを、文章にまとめるだ

け。それでも父は、一言一句、文句をつけてくる。あなたにも、どんな難癖

をつけてくるかわからない。どうか年寄りのワガママだと思って、我慢して

ください。でも、まだ決まったわけじゃありませんから。

仁一 ああ、そうでしたね。
有田 なんだからこの人、浦神さんを嫌ってるみたいだな。親子なのにどうして。
若菜 仁一さんは養子なの。浦神さんの遠い親戚で、子供の頃にご両親が亡くなつて、浦神さんに引き取られたんだって。
有田 浦神さんに奥さんは？
若菜 浦神さんは、ずっと独身だったの。
いない。浦神さんは、ずっと独身だったの。

そこへ、箕島がやってくる。手はコップを載せたお盆。

箕島 お茶をお持ちしました。

仁一 ありがとうございます。遅いな。いつまで待たせるつもりだ。

岩代 僕らのことなら、気にしないでください。早く来すぎたのがいけないんです。

仁一 しかし、もう十分は経ってる。ちよつと見てきます。

優花 仁一さん、待って。あなたは会社ではお義父様の秘書かもしれないけど、この家では息子なのよ。お義父様のお世話は道成寺さんに任せなさいよ。

仁一 そうだな。彼女に任せておけば、安心だ。

そこへ、浦神信雄・道成寺がやってくる。

道成寺 お待たせいたしました。

優花 (浦神を見て叫ぶ)

道成寺 優花様、どうなさいました？

優花 何でもない。ちよつとめまいがして。(気を失う)

仁一

優花！（優花の体を支えて）そう言えば、昨夜から熱があるって言ってたんだ。（浦神に）しばらく、部屋で休ませます。

仁一が優花を抱き抱えて、去る。道成寺・箕島も去る。

岩代

（浦神に）ついさっきまで、普通に話していらっしやっただけですが。

若菜

まるで、ホラー映画のワンシーンみたいだったね。

岩代

確かに。浦神さんが幽霊にでも見えたのかな？

有田

え？

浦神

それはどういう意味ですか？

岩代

深い意味はありません。今のは軽い冗談です。お気に障ったら、お詫びします。

若菜
岩代

岩代君、ご挨拶。

そうだった。（浦神に）ご挨拶が遅れて、申し訳ありません。（名刺を差し出して）私、緊張社の岩代と申します。こちらはフリーライターの白浜さんです。

（浦神に名刺を差し出して）白浜若菜です。初めまして。

（受け取って）そうか。あなたは若菜って名前だったんですね。

ええ、そうですけど。

浦神

（浦神に）先日、部長の下里から、浦神さんの自伝を代筆する作家を探している

と聞きまして、私が白浜さんを推薦したんです。白浜さんは今はまだ無名ですが、作家としての実力は確かです。必ず浦神さんのご期待に沿えると思います。あ、これは白浜さんの履歴書と、白浜さんが書いた文章のコピー

浦神 　　です。（書類を差し出す）
若菜 　　（受け取って、若菜に）わかりました。あなたに決めましょう。
浦神 　　え？でも、まだ何も読んでないのに。
若菜 　　あなたはプロの作家になりたいんでしょう？　　だったら、この仕事をやるべきだ。頑張ってください。
若菜 　　はい、頑張ります。

浦神・岩代が去る。

有田 　　え？　　これで決まり？　　何だか調子が狂うなあ。
若菜 　　私も、一気に力が抜けた。
有田 　　浦神さんって、仁一さんが言ってた感じと違わないか？
若菜 　　全然違ってた。明るくて、颯爽としてて。
有田 　　そうだよな。ホテル業界の帝王には、全然見えなかった。
若菜 　　とにかく、私は面接に合格。次の日から一週間、浦神さんにインタビューをする事になったの。
有田 　　そのインタビューを元にして、自伝を書いたわけだ。
若菜 　　自伝の話は、また後で。
有田 　　どうして？
若菜 　　夜、家に帰ると、とんでもない知らせが待ってた。

①八月八日夜、若菜の家。湯浅洋恵がやってくる。丸めた凶面とケーキの箱を持っている。若菜の後ろから忍び寄り、凶面で若菜の背中を軽く叩く。若菜が叫ぶ。有田も叫ぶ。

洋恵 スキあり。

若菜 おばさん。もう、びっくりさせないで。

洋恵 油断してる方が悪い。玄関の鍵、開いてたよ。ここん家は男っ気がないんだから、用心しなさいってずっと言ってるのに。

若菜 私じゃない、お母さんだよ。今日は、お母さんの方が帰りが遅かったから。

洋恵 (ケーキの箱を示して) これ、うちのチーズケーキ。余り物で悪いけど。

若菜 嬉しい。いつもありがとう。

有田 (若菜に) この人は？

若菜 お母さんの妹の洋恵さん。青山のイタリアンレストランで、シェフをしてる。

有田 そう言えば、白浜さんのお父さんは？

若菜 私が小学校に入る前に、亡くなっただ。

そこへ、邦子がやってくる。麦茶が入ったグラスを載せたお盆を持っている。

邦子 洋恵。どうしたの、こんな時間に。

邦子 若菜 洋恵 邦子 洋恵 邦子 若菜 邦子 若菜 洋恵 邦子 洋恵 邦子 若菜 邦子 洋恵 邦子 洋恵 邦子 若菜 邦子 若菜 邦子 洋恵

姉さんに、一刻も早く、これを見せたくて。（と図面を広げて）場所は清澄

白河。駅から十五分ぐらい歩くけど、商店街の通り沿いだから、立地は抜群。

（見て）お店の図面？

そう。前は喫茶店だったのよ。でも、ランチもやってたから、厨房はそのまま使える。（邦子に）ここなら、内装に少し手を入れるだけで行けそうよ。

（見て）席数は？

ちょうど20。カウンターが6席、6人掛けのテーブルが1つと、4人掛け

が2つ。理想的でしょう？

写真は？

今日は図面だけ。下見はいつでもできるって。

下見って？ 二人とも、何の話をしてるの？

え？ 姉さん、話してないの？

今日、これから話そうと思ってたの。

ワオ。私、フライングしちゃったのね？ ごめん。

どういうこと？

実はね。図書館を辞めて、洋恵とお店を開くことになったの。

辞める？ 司書を辞めるってこと？ お店って？

昔からの夢だったのよ。小さくてもいいから、自分で食堂をやることが。

あら、食堂じゃなくてトラットリアよ。

でも、トラットリアは、食堂って意味でしょう？

それはそうだけど、言葉から受けるイメージが全然違うじゃない。

ちよっと待って。お母さんが食堂？ そんなの初めて聞いたよ。

こんなに早く実現できるとは思ってなかったから。定年になった時に、もし

若菜 洋恵
若菜 洋恵

若菜 洋恵 邦子
若菜 洋恵 邦子
若菜 邦子
邦子 洋恵 邦子
邦子 洋恵 邦子
邦子 洋恵 邦子

お金の余裕があつたら、考えるつもりだったの。

お母さん、今、五十六歳だよ。定年には四年もあるのに、どうして？
私が頼んだからよ。協力してくれて。

おばさんが？

私も自分の店を持ちたくて、資金も貯めてきた。でも、一人で開業できるまでには届いてなくて。だけど、今、働いてる店に、将来有望なシェフがいてね。私としては、彼女にチーフを譲りたいの。オーナーはまだ若いって渋ってるけど、私が独立すれば、絶対に考え直すはず。

その人なら、おばさんの代わりになれるって？

それ以上よ。で、姉さんに聞いたの。今でも、食堂をやりたい？

そう聞かれて、考えたんだ。洋恵と二人なら、お金はなんとかなる。今、やらない理由は、どこにもないって。

でも、図書館は？ お母さんだって、主任でしょう？ 急にいなくなったら、

他の人たちが困るんじゃないの？

そこは平気。私が抜けた穴ぐらい、すぐにカバーできると思う。そういう指導をしてきたし。

さすが姉さん。

それでね、若菜。私は、貯金をほとんど使うことになると思う。将来、あなたに、何も残せないかもしれない。ごめんね。

そんな先のことはどうでもいいけど。

賛成してくれる？

私が反対したって、やるんでしょ？

じゃ、認めてくれるのね？

若菜 お母さん一人だったら、止めたけど。おばさんが一緒なら。
邦子 ありがとう、若菜。
洋恵 姉さん、乾杯しない？ 実は、店からおいしいワインも持ってきたんだ。
邦子 待ってて。グラスを取ってくる。

邦子が去る。

洋恵 ねえ、若菜ちゃんもお店、手伝ってくれない？ あなたも料理、得意でしょう？

若菜 今は無理。やらなきゃいけない仕事があるから。

洋恵 仕事って小説？ 新人賞は落っこちたんじゃなかったっけ？

有田 はつきり言うなあ。

若菜 おばさん、浦神信雄って知ってる？

洋恵 知らないわけじゃないでしょう。あんな有名な人を。

若菜 浦神さんとお母さんの間に、何があったか聞いてない？

洋恵 どうしたの、急に。

若菜 何か知ってるなら、教えて。お願い。

洋恵 姉さんは何て言ってるの？

若菜 昔の知り合いだって。でも、それだけとは思えなくて。

洋恵 私に言えるのは一つだけ。姉さんが、辛い思いをさせられたってこと。

洋恵が去る。

有田 辛い思い。ってことは、やっぱり、本当だったんだ。本当に君のお母さんは、

浦神さんと。

若菜 私だって信じられなかった。でも、おばさんは嘘をつくような人じゃない。

有田 一体、何があったんだろう。浦神さんとお母さんの間に。

若菜 次の日。私と岩代くんは、再び浦神さんを訪ねた。

② 八月九日夜、浦神信雄の屋敷、応接室。岩代・仁一・優花がやってくる。

仁一 昨日はすみませんでした。優花が驚かせてしまつて。

岩代 (優花に) お体の具合は、もう大丈夫なんですか？

優花 ええ、すっかり。ただの風邪ですから、お気遣いなく。

若菜 間違っていたらすみません。私には、浦神さんを怖がっていらっしやるように見えたんですが。

岩代 白浜さん、言葉に気をつけて。

優花 (若菜に) ええ。あなたの仰る通りです。義父は厳しい人ですから。

若菜 経営者として厳しい方だということは何っています。ご家庭でも、同じだと

いうことでしょうか？

優花 義父は、仕事以外のことには興味がないんです。私とこの人が結婚したのは

五年前ですけど、義父は最初、披露宴に出ないと云つたんです。その頃、ハ

ワイにホテルを作る話が進んでいて、現地を見に行くからつて。私が出てほ

しいと頼んだら、凍りつくような目で睨まれました。もう、怖いやらシヨツ

クやらで、私、熱を出して寝込んでしまつて。

仁一 (若菜に) 結局、僕がハワイ行きをなんとか調整して、出席してもらつたん

優花

ですけどね。

（若菜に）その時、思ったんです。義父に、家庭的な温かさを求めても無駄だって。実際、結婚してから、義父と主人が親子らしい会話をしているの聞いたことがありません。だから、今でも義父と会うと、緊張してしまってます。

若菜
仁一

浦神さんは、昔から、厳しい方だったんでしょか？
そうですね。僕が引き取られたのが二十年前で、その時は既に。

そこへ、道成寺がやってくる。

道成寺

仁一

お待たせいたしました。間もなく、旦那様がいらつしやいます。
わかった。（優花に）僕らは部屋に戻ろう。

優花

道成寺

仁一

昔のアルバムを、片っ端から御覧になつていらつしやいました。

（若菜に）そうそう。大事なことを忘れていました。昨日から、父がおかしなことを始めまして。わざと的外れた会話をし、こちらを困らせようとするんですよ。目に余るようでしたら、後で僕らに教えてください。

仁一・優花が去る。

岩代

（若菜に）頼むから、おかしな質問はするなよ。浦神さんの顔色を、よく観察するんだ。（自分の鞆を叩いて）俺が、こうやったら、「やめとけ」って意味だからな。

若菜

わかった。

浦神がやってくる。道成寺が去る。

浦神　こんばんは。あれ？　岩代さん、今日も一緒に来たんですか？

岩代　インタビュアーが軌道に乗るまでは、立ち会わせていたかどうかと。余計な口

浦神　出しは絶対にしません。

浦神　いやいや、僕もこういうことには不慣れなんて、遠慮しないで、どんどんアドバイスしてください。あ、もちろん、白浜さんも。

若菜　（ICレコーダーを出して）失礼ですが、録音させていただいてもよろしいですか？

浦神　どうぞどうぞ。

若菜　それでは始めさせていただきます。浦神さんは一九五六年の七月四日に、東京都中央区の聖路加病院でお生まれになりましたよね？

浦神　そうです。体重は二八三〇グラム。予定日の一カ月前で、かなりの難産だったそうです。

若菜　一番古い記憶は？

浦神　一番古い記憶ですか？　そうですね。（誰もいない空間を見る）

浦神　（浦神が見た方向を見る。不審）
（若菜に）保育園の運動会です。玉入れ競争で、一つも玉が入らなくて、大

若菜　泣きしたのを覚えています。

浦神　保育園？　こちらの資料には、千代田区の三つ葉幼稚園のご出身と書いてあります。

浦神　間違えました。幼稚園でした。何しろ六〇年も前のことなので。

若菜 幼稚園入園は一九六〇年、つまり、五十六年前ですね。

そこへ、箕島がやってくる。手にはカップを載せたお盆。

箕島 遅くなつて、申し訳ありません。

浦神 いや、ちょうど喉が渴いたところだったんだ。ありがとう。

若菜 それじゃ、次の質問です。最初のご友人は、幼稚園の同級生ですか？

浦神 最初のご友人ですか？ そうですね。（誰もいない空間を見る）

若菜・岩代 （浦神が見た方向を見る。不審）

浦神 （若菜に）山田君です。下の名前は覚えてませんが。

若菜 （ノートをみて）今、衆議院議員をなさっている、山田陸平さんですね？

浦神 山田さんとの最初の出会いは、もちろん、入園式です。

若菜 （誰もいない空間を見て、若菜に）最初の出会いは、もちろん、入園式です。

浦神 先に話しかけたのは？

若菜 ダメです。思い出せません。

浦神 じゃ、山田さんのお付き合いの中で、一番印象に残っていることは？

若菜 それも思い出せない。すみません、山田君のことはこれくらいにして、次の話題に移りませんか？

若菜 でも、「山田陸平君と友達だった」だけじゃ、おもしろみがありません。何か一つでも、エピソードを加えないと。

浦神 浦神さんは覚えてないと仰ってるんだ。その話題はおしまいにしよう。

岩代

箕島が去る。

若菜

浦神

若菜

浦神

若菜

浦神

若菜

岩代

浦神

岩代

浦神

岩代

岩代が去る。

（浦神に）じゃ、最初のクラスの担任の、稲原先生の思い出は？

すみません。僕にはわかりません。

そんなはずはないでしょう？（雑誌を出して）これ、五年前の週刊緊張です。

浦神さんは稲原先生の思い出をいろいろお話しになっていきます。

（誰もいない空間を見て、若菜に）そんな稲原先生のことが書きたいなら、

その雑誌に書いてあることを写せばいいでしょう。

私は浦神さんからお聞きしたいんです。できれば、ここに書いてないことを。

無理ですよ、そんなこと。

どうしてですか？ 私は、浦神さんが今まで誰にも話してないことを書きた

い。本当の浦神さんが書きたいんです。

（鞆を叩いて）白浜さん、落ち着いて。お茶でも飲んで、ちよつと休憩しま

しょう。

岩代さん、ちよつと席を外してもらえますか？

浦神さん、お腹立ちはよくわかりますが、今日はまだ初日です。白浜さんに

は私から注意しておきますので。

僕は別に怒ってません。ですから、席を。

わかりました。

若菜
浦神

私、何か失礼なことを言ったでしょう？

いいえ、何も。あなたはいい本を作るために一生懸命頑張ってる。文句は何

もありません。

じゃ、どうして岩代さんを外へ？

あなたにどうしてもお話ししたいことかあつて。(誰もいない空間に) ええ、そのつもりです。やっぱり、僕には他人の真似なんて、無理なんだ。

浦神さん、誰に向かつて、話してるんですか？

白浜さん、僕は浦神さんじゃないんです。(誰もいない空間に) 止めても無駄ですよ。

浦神さん？

(誰もいない空間を見て、若菜に) 僕の本当の名前は新宮弘樹。今から八日前に、天使の手違いで死んだんです。

今、なんて言いました？ 新宮？ 天使？ 死んだ？

そうです。だから、僕は浦神さんのことは何も知らない。あなたの質問には

答えられないんです。

私のこと、からかってるんですか？

違います。

だったら、どうしてそんなバカげた話をするんですか？

つきりそう言えればいいでしょう？ 私がいやなら、は

そこへ、岩代がやってくる。

(若菜に) どうしたんだ。大きな声を出して。

私、帰ります。

白浜さん、待ってください。

岩代
若菜
浦神

若菜
浦神
若菜
浦神
若菜
浦神

浦神
若菜
浦神

若菜
岩代

お役に立てなくて、申し訳ありませんでした。
白浜さん！（浦神に）すみません。後で連絡します。

若菜・岩代が去る。反対側へ、浦神が去る。

有田

え？ 何だ、今の？ 浦神さん、どうしちゃったんだ？
死んだ？ 一体、何のためにそんなことを言ったんだ？

天使の手違い？

若菜が戻ってくる。

若菜

その時、私が出した結論はこう。浦神さんは、私のことが気に入らなかった。
だから、わざと私を怒らせようとして、あんなことを。

ひどいな。待てよ。浦神じゃなくて、誰だっけ名乗ってたっけ？

有田

新宮よ。新宮弘樹。

若菜

それって、浦神さんの前に、同じ役をやるはずだった人の名前じゃないか？
ほら、一カ月前に、交通事故で亡くなった。君も知ってるだろう？

若菜

今はね。でも、この時は知らなかった。この時点では、浦神さんが映画に出
るなんて想像もしてなかった。それは、浦神さんも一緒だったと思う。

有田

そうか。じゃ、なぜ新宮って名前を出したんだ？ 知り合いだったのか？
それを今、話そうとしてるんだけど。

若菜

浦神さんには、最後まで聞くよ。それで？
浦神さんには、二度と会いたくないと思った。ゴーストも断るつもりだった。
だった？ っていうことは、また事情が変わったのか？

有田

若菜 家に帰る途中で、お母さんからメールが来た。お店の下見に付き合っ
てほしい。

① 八月九日夜、レストラン。邦子・洋恵・湯浅日出男・湯浅勝が椅子に座っている。

洋恵 どう、若菜ちゃん？ なかなかいい雰囲気でしょう？

若菜 外から見た感じと全然違うね。建物は古いのに、お店の中はすごくキレイ。
僕もいい物件だと思う。水回りもしっかりしてるし。ただ、ちよつとシンク

が高い気がするけど。

有田 (若菜に、日出男と勝を示して) この人たちは？

若菜 おばさんの旦那さんと、息子さん。旦那さんの日出男さんは、建設会社に勤
めてるの。

邦子 前の喫茶店は、歴史が古くてね。結構、繁盛してたみたい。でも、店長さん
が、いよいよ引退することになって、跡を継ぐ人もいなくて。

洋恵 (若菜に) その店長さん、八十歳で、身長が一九〇もあったのよ。だから、
私を使うには、ちよつとシンクが高くて。でも、順調に行けば、一年後には

リフォームできるお金が貯まると思う。

勝 呑気だな、母さんは。半年も持たずに潰れるかもしれないだろ。

日出男

勝 こら、勝。縁起の悪いことを言うんじゃない。

洋恵

俺は、シビアに考えろって言うてるの。母さんは、経営に関しては素人だろ。
失礼ね。私は今の店で、仕入れから値段設定まで、一通り任されてるのよ。
独立だって、昨日や今日、思いついたわけじゃない。それなりに準備もして
きたんだから。

勝
日出男

だからって、うまく行く保証がどこにあるんだよ。
おい、勝。いい加減にしないか。

勝
日出男

俺にはわかんないよ。なんで父さんが反対しないのか。
母さんを見くびるな。母さんは、やると決めたら、とことんやる人だ。それ
を応援するのが、家族ってものだろう。

洋恵

ありがとう、ヒデくん。
夫婦揃って呑気だな。(立ち上がる)

勝
洋恵

ちよつと、どこ行くの？
トイレだよ。

勝が去る。

日出男

すみません、お義姉さん、若菜ちゃん。二人の前で親子喧嘩なんかして。
謝ることないよ。あの子、就職が決まらなくて、イライラしてるだけなんだ
から。

邦子

あなたのことが心配なのよ。そうじゃなかったら、ここに来るはずないもの。
勝くんの気持ちわかる。私も、最初は不安だったし。

若菜
日出男

何だよ。若菜ちゃんも反対なのか？
最初は、って言ったでしょう？ おばさんが一緒なら、大丈夫だと思った。
それはこっちのセリフだよ。僕は、お義姉さんと一緒だって聞いたから賛成
したんだ。

若菜
日出男

そうだったの？ どうして？
お義姉さんの笑顔には、人を引きつける力がある。優しいって言うか、癒さ

洋恵

そうだったの？ どうして？
お義姉さんの笑顔には、人を引きつける力がある。優しいって言うか、癒さ

日出男

そうだったの？ どうして？
お義姉さんの笑顔には、人を引きつける力がある。優しいって言うか、癒さ

れるっていうか。君が料理を作り、お義姉さんが笑顔で客をもてなす。最強のコンビじゃないか。

私の笑顔は？ 癒されないの？

（時計を見て）お、もうこんな時間か。（邦子に）下見は九時までって約束でしたよね？ そろそろ出ないと。

そこまで怯えなくても。

勝が戻ってくる。女物のバッグを持っている。

勝 おばさん。（バッグを示して）これ、おばさんのですか？

邦子 そうよ。イヤだ、私、置き忘れてたのね。ありがとう。（と受け取る）

日 出 男 お義姉さん、腹が空きませんか。どこか食事ができる店はあるかな。

洋 恵 駅の近くに行けば、何かあると思うけど。

勝 おばさん、どこか悪いんですか？

邦子 え？ 私は元気よ。どうして？

勝 俺、その鞆に肘をぶつけて、落としちゃったんです。そしたら、中から菓子の袋が出てきて。

邦子 ああ。それは今日、病院に行ってきたから。

若 菜 病院に？ どうして？

洋 恵 姉さん、風邪でも引いたの？ 大事な時なんだから、気をつけてよ。

勝 菓だけじゃない。病院のパンフレットも見たんだ。そのパンフレットは。

洋 恵 やめなさい、勝！ 余計なこと言わないで！

日 出 男 おい、何をムキになってるんだ。

洋恵

若菜

洋恵

邦子

若菜

邦子

日出男

勝

有田

若菜

有田

若菜

有田

若菜

有田

② 若菜の家。

邦子

日出男

ムキになんかなってない。姉さん、行こう。

待ってよ、おばさん。お母さん、教えて。病院に行ったのは何のため？

だから、風邪だって言ってるでしょう？

洋恵、もういいのよ。いつかはわかることなんだから。

わかるって、何が？

家に帰ろう。帰ってから、ちやんと話す。

僕も行きます。迷惑じゃなかったら。

俺も行く。

それで？

お母さん、臍臓にガンが見つかったんだって。専門のお医者さんの話だと、臍臓の手術は難しく、完全に切除することはできない。たとえ成功しても、再発する可能性が高い。体に大きな負担をかけるから、手術は避けた方がいいって。

勝くんが見たって言うパンフレットには、何が載ってたの？

施設の案内。もう治療ができない患者さんのための。

そんな。

でもね、今すぐどうこうってわけじゃないの。私は見ての通り元気だし、どこにも痛いところはない。(パンフレットを示して)これは、念のためにももらっただけで。でも、いつか、必要になるかもしれないんですよ？ 医者は具体的なこと

邦子

日出男

洋恵

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

日出男

洋恵

日出男

洋恵

を言わなかつたんですか？

早い人で一年だつて。でも、私の場合は進行が遅いから、もっと先になる可能性が高い。同じ病気で、十年以上、普通に生活してる人もいるんだつて。全員がそうだつてわけじゃない。どうしてすぐに入院しないんです。

聞いてなかつたの？ 手術はできないのよ。

その医者が間違つてゐるってこともある。(邦子に) 病院を変えましょう。僕が探してきますから。

日出男さん、落ち着いて。私も、伊達に司書をやつてない。読める本は全部読んだし、ネットでも散々調べた。その結果、選んだ病院なのよ。

入院しないでどうするの？ 病気が進むのを放つておくの？
これからは、私に合つた薬を、通院しながら試すことになつてゐる。もちろん、生活習慣には気をつけるし、必要な時には入院もする。

こんな大事なこと、どうして黙つたの？

ごめんね。余計な心配をかけたくなかつたから。

何が余計よ。娘が親の心配をするのは当然でしょう？

洋恵。今日見た物件、仮契約はしたのか？

まだよ。明日、不動産屋に行つてから。

行く必要はない。今回の話はキャンセルだ。

わからぬのか？ お義姉さんがこんな状況で、店なんかできないだろう。さつきと言つてることが違わない？ 応援してくれるんじゃないの？

病氣のことを知らなかつたからだ。知つた以上、許すわけにはいかない。

私がいつ、あなたに許してほしいなんて言つた？

勝 日 出 男
やめろよ、二人とも。夫婦喧嘩なら家でやれよ、みつともない。

日 出 男
おまえは黙ってる。

邦 子
日 出 男 さん、心配してくれてありがとう。でも、これは、私がよく考えて、考え抜いて出した結論なの。

日 出 男

邦 子

私は大丈夫。お店をやるって決めてから、毎日が楽しくて、前より元気になったぐらい。せっかく始めるんだもの、一年なんかじゃ終わらせない。十年だって、二十年だって続けていくつもり。みんなには迷惑をかけるかもしれないけど。

洋 恵
姉さん、それは言わない約束でしょう？ 私は迷惑だなんて思わないから。

勝 洋 恵

勝 洋 恵

洋 恵

お婆さんが倒れたらどうするんだよ。母さん一人で、やっていけるのか？

それは、その時になつてから考える。

甘いよ。どうしても店がやりたいなら、他の人とやればいいじゃないか。

あんた、何もわかつてないのね。私は、今、姉さんとだから、やるって決めたの。姉さんのそばにいるって。先のことなんかどうでもいい。今しかでき

ないことをやりたいのよ。

お義姉さんの体のことは考えないのか。店をやるのが、どれだけ負担になるか、君ならわかるだろう。

日 出 男 さん、悪い方にばかり考えないで。私は大丈夫だから。

申し訳ないけど、これだけは譲れません。僕は反対です。お義姉さんは、一

日 出 男 さん。日でも早く治療に専念してください。この通りです。（頭を下げる）

日 出 男 さん。

（洋恵に）帰るぞ。

邦 子
日 出 男

邦 子
日 出 男

日 出 男

日出男が去る。

洋恵
（邦子に）心配しないで。旦那は私が説得するから。
勝 本心に甘いな、母さんは。

洋恵・勝が去る。

邦子
ごめんね、若菜。

若菜
謝るぐらいなら、話してくればよかったのに。

邦子
ごめんね。

若菜
どうしてこんな時に、店をやるうなんて思えるの？

邦子
こんな時だからよ。前に言ったよね。いつかは、お店をやるつもりだったつて。でも、病気がわかって、それじゃ駄目なんだつて気が付いた。どうしてもやりたいことなら、後回しにしちやいけない。すぐに挑戦するべきだつて気が付いて、本当によかったと思つてる。そうじゃなかったら、きっと後悔してたから。

邦子が去る。

有田 強い人だな。僕だったら、何かに挑戦しようなんて思えるかどうか。
 若菜 私も同じことを考えた。その日は、朝までずっと眠れなくて。
 有田 で、どうすることにしたの？ お母さんを止める？ それとも応援する？
 若菜 次の日。私は岩代くんを呼び出した。

① 八月十日昼、喫茶店。岩代がやってくる。

岩代 何だよ、話って。昨日のことなら、ものすごく怒ってるぞ。
 若菜 ごめんなさい。旭くんの顔に泥を塗るような真似をして。
 岩代 俺のことはどうでもいい。おまえ、浦神さんに、どれだけ失礼なことをした
 かわかってるのか？ せっかく時間を作ってもらったのに、途中で逃げ出す
 ヤツがいるかよ。何がやる気満々だよ、笑わせるな。
 若菜 てつきり、クビになったと思っただ。あまりにバカげた話をされたから。
 岩代 それは、おまえを試したんだって。おまえにどこまで根性があるか、確かめ
 ようとしたんだ。
 若菜 だからって、天使まで持ち出す必要がある？
 岩代 おまえ、謝りたいのかケンカしたいのかはつきりしろよ。
 若菜 ごめんなさい。昨日のことは、心から反省してる。だから、やり直しをさせ

岩代 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜 有田 岩代 若菜 岩代 若菜 若菜 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜

てくれないかな。

やり直し？

岩代 今度こそ、最後までやり抜く。自伝を書き上げるまで、何があっても逃げないって約束するから。

岩代 本当か？

若菜 浦神さんには誠心誠意、謝る。旭くんにも力を貸してほしい。お願いします。どういふ風の吹き回しだ？ 最初はゴーストなんか絶対にイヤだって言ってたのに。

若菜 本を出したいんだ。どんな形でもいいから、自分で書いた本を。

岩代 だったら、小説を書けばいい。いくらでも協力してやるよ。

若菜 それじゃ、いつ出版できるかわからない。なるべく早く本にしたいの。できれば、一年以内に。

岩代 おまえ、何、焦ってるんだ？ 何かあったのか？

岩代 別に何も。

若菜 嘘つけ。一睡もしてないって顔しやがって。何があったんだよ。正直に言え。話したの？ お母さんのこと。

若菜 病気のこと以外は。私の気持ちを変えたのは、間違はなく、お母さんだから。なるほどな。お婆さんの熱気にあてられたってわけか。

岩代 お母さんに負けてられないもの。私も何か、新しいことに挑戦しないと。

岩代 わかった。俺が何とかしてやるよ。

若菜 ありがとう。

岩代 善は急げだ。このまま浦神さんに会いに行こう。

若菜・岩代が立ち上がり、歩き出す。

岩代

若菜

岩代

有田

若菜

岩代

若菜

岩代

有田

②八月十日夜、浦神信雄の屋敷、応接室。道成寺・箕島がやってくる。

道成寺

岩代

有田

道成寺

若菜

道成寺

道成寺

ただし、やるからには、中途半端なことするなよ。たとえ拒否されても、諦めるな。どんなにかわされても、相討ち覚悟で食らいつくんのだ。

言われなくてもそうするよ。

いいか？ 浦神さんを主人公にして、小説を書くと思え。浦神さんになりきるんだよ。浦神さんの目で見、浦神さんの耳で聞くんだ。

大丈夫か、この人。変なスイッチ入ってないか？

いつもこう。小説の話は熱くなるの。

よし、行くぞ。覚悟はいいか。

旭くんこそ。

バカ野郎。俺の覚悟は、とっくにできてる。

確かに熱い。必要以上に。

旦那様は、すぐにいらっしやるとのことでした。

すみません、凶々しく押しかけて。浦神さん、さぞ、お怒りでしょうね。

さっきの勢いはどこへ。

私には、旦那様のお気持ちにはわかりかねます。一昨日までは、お顔を見れば、

概ね推察できたのですが。

一昨日から、変わったことですか？ どんなふうにか？

今のは失言でした。どうぞお忘れになってください。

若菜

昨日、仁一さんが言っていましたよね？ 浦神さんがおかしなことを始めたつて。道成寺さんも、心当たりがあるんじゃないですか？

箕島

（道成寺に）正直に言っちゃったらどうですか？

道成寺

余計なことを言うんじゃないやありません。

若菜

（道成寺に）浦神さんは、誰もいない場所に向かって話をしてませんか？

道成寺

白浜さんも御覧になったんですか？ あ。

若菜

やっぱり、そうなんですネ？

道成寺

楽になっちゃいましたよ、道成寺さん。

箕島

ここだけの話にしてくださいませるか。

有田

もちろんです。

岩代

実は、旦那様には、お姿の见えないご友人がいらっしやるようなのです。お名前はアル様。何かにつけて、アル様と話をしているらしい。

道成寺

私たちは、アル・パチーノの幻じゃないかって言ってるんです。

若菜

（箕島に）それはまた、ずいぶん突拍子もない話だな。

道成寺

恐らく、お疲れが原因の、一時的なものではないかと。私共は、旦那様を、温かく見守る所存です。よろしいですか？ ここだけの話ですからね？

若菜

了解しました。

あー、スッキリした。誰かに言いたくて、うずうずしてたんです。

そこへ、浦神がやってくる。

浦神

お待たせしました。

岩代

浦神さん、アポイントメントも取らずに押しかけて、すみません。一刻も早くお詫びをと思ひまして。

浦神

お詫びって？

岩代

昨夜の件ですよ。本当に申し訳ありませんでした。白浜さんも深く反省していますので、今回だけはお許しただけなんでしょうか。白浜さん。

若菜

（新宮に）申し訳ありませんでした。

浦神

ということは、ゴーストライターは辞めないんですか？

岩代

本人はぜひ続けさせていた言いたいと言ってます。浦神さん、どうか白浜さんにもう一度チャンスをください。

浦神

いいですよ。

岩代

本当ですか？

浦神

僕はもともと白浜さんに書いてほしかつたし。昨夜は突然おかしな話を始めた僕も悪かった。すべてを水に流して、もう一度始めからやり直しましょう。

岩代

ありがとうございます。

浦神

道成寺さん、僕にも何か飲み物をお願いします。

道成寺

畏まりました。

道成寺・箕島が去る。

浦神

（若菜に）でも、正直に言うと、驚きました。どうしてたったの一晩で気が変わったんですか？

若菜

お恥ずかしい話ですけど、私は作家としてはまだ半人前です。自分の本を出

浦神

若菜

浦神

若菜

岩代

浦神

岩代

浦神

若菜

浦神

若菜

したことがあります。でも、この仕事をやり遂げれば。

自分の本が出せることです。その気持ち、僕にもよくわかります。でも、インタビューを始める前に、白浜さんにお伝えしなくちゃいけないことがあります。

何ですか？

実は一昨日、地下室の階段から落ちましてね。頭を強く打ったんです。そのせいか、記憶が混乱してしまって、細かいことが思い出せない。

だから、いきなりあんな話を？

（浦神に）「僕は浦神さんじゃない」って仰ったそうですね。僕はてっきり、白浜さんをかからかわれたのかと思っただけです。

今の僕は、階段から落ちる前の僕じゃない。言ってみれば、偽物なんです。それはちよつと言い過ぎでは？

いや、事実です。だから、白浜さんが期待しているような話はできない。山田さんの話はもう聞きません。それと、稲原先生の話も。

でも、あなたは言いましたよね？「浦神さんが今まで誰にも話していないことを書きたい」って。

私は本当の浦神さんが書きたいんです。でも、それは無理なんです。僕は偽物なんだから。

そんなに難しく考えることはないんじゃないかな。前に一度話したことも、相手が変われば、違う言葉になる。大切なのは、今、どう思つかです。そうだろう、白浜さん？

でも、僕は記憶が混乱していて。だったら、浦神さんが話したいことを話してください。子供の頃から順番に。

浦神 子供の頃の話ですか？

そこへ、箕島がやってくる。

箕島 お茶をお持ちしました。

浦神 箕島さん、君は何か聞いてないかい？ 浦神さんの子供の頃の話。

箕島 旦那様のですか？ そうですね。お父様が厳しかったというお話は何度もな

さっていました。毎日、グーで叩かれたって。

浦神 そういう暗い話じゃなくて、笑える話はないの？

若菜 箕島さんは子供の頃、何になりましたか？

箕島 私ですか？ 私はアイドルになりましたか？ テレビでモーニング娘。を

見て、私もあんなふうになりたいと思っちゃって。クラスの女子全員で練習

してました。

若菜 浦神さんは？ 一体何になりましたか？

浦神 僕は。 浦神さんの時代だと、石原裕次郎か小林旭じゃないですか？

岩代 白浜さん、ちよつと来てください。

浦神 どこへ？

若菜 庭です。いいから、早く。

若菜・浦神が去る。有田も去る。

箕島 このお飲み物、どうしましょう？ お持ちした方がよろしいでしょうか？

岩代

いいって、いいって。しばらく二人だけにしておこう。それより、僕は子供の頃、Bが好きでね。稲葉浩志みたいになるのが夢だったんだ。

箕島
岩代

残念でしたね。僕としては結構いい線まで来てると思うんだけど。

③庭。 若菜・有田・浦神がやってくる。浦神の手には傘。

有田

(浦神に) そんなものを持ち出してどうするつもりだ？

若菜
浦神

浦神さん、その傘は何ですか？ 雨は降ってませんよ。これは刀の代わりです。家の中で振り回したら、危ないと思ったんで。

浦神が傘を刀のように振り回す。腰を押さえて、しゃがみ込む。

若菜

大丈夫ですか？

浦神

子供の頃に黒澤明の『七人の侍』を見たんです。三船敏郎が無茶苦茶カッコよかったです。僕もあんなふうになりたいと思った。それで役者を目指したんです。

若菜

浦神さんが役者を？ そんなの初耳です。

浦神

箕島さんの話を聞いて、ふと思いついたんです。

若菜
浦神

今はもう役者には興味がないんですか？

浦神

ありませんよ。できることなら、今すぐにもやりたいです。無理です。僕を使ってくれる監督なんて、いるわけがない。

若菜 だったら、自分で作ればいいじゃないですか。
浦神 作るって、映画をですか？
若菜 できるでしょう？ 今の浦神さんにはそれだけの力があるんだから。
浦神 僕が映画を作る？

その時、上から植木鉢が次々と落ちてくる。浦神が傘で植木鉢を次々と打ち落とす。そこへ、道成寺が走ってくる。

道成寺

旦那様、ご無事ですか？

浦神

僕は何ともない。白浜さんは？

白浜

平気です。浦神さんが助けてくださったので。

道成寺

（上を見て）二階のベランダから落ちたんですね。風も吹いてないのに、どうして。

浦神・道成寺が去る。若菜が周囲を見回す。

有田

なぜいきなり植木鉢が落ちてくるんだ？ なぜそれが傘で打ち返せるんだ？

若菜

そんなこと、私に聞かれても。

有田

まさか、あの植木鉢はアル様が落としたとか？

若菜

道成寺さんが言ってた話？ 幻に植木鉢が落とせると思う？

有田

そんなわけないよね。じゃ、一体どうして？

若菜

その日の夜。私が家に帰ると。

① 八月十日夜、若菜の家。洋恵が椅子に座って、写真を見ている。机の上にミニアルバム。

洋恵 お帰り、若菜ちゃん。

若菜 あれ、おばさん、来てたんだ。お店の打ち合わせ？

洋恵 まあね。それより、これ、見てよ。姉さんが大学生の頃の写真。

若菜 (見て) うわ、お母さん、まん丸。え、このセーラー服着てる子がおばさん？
どうしてこんなにスカートが長いの？

洋恵 そういう時代だったのよ。

そこへ、邦子がやってくる。麦茶を入れたコップを載せたお盆を持っている。

邦子 お帰り、若菜。メール読んだよ。ご飯は旭さんと食べてきたのよね。

洋恵 美容室の息子と？ (若菜に) あんたち付き合ってるの？

若菜 そんなわけありません。仕事の打ち合わせです。

洋恵 わかってます。浦神さんの自伝を書くんだって？ 妙な巡り合わせだね。

若菜 まさか、若菜ちゃんがあの人と仕事をするなんて。

邦子 (写真を見て) 何よ、これ。こんな写真、どこから出してきたの？
私ที่บ้านから持ってきた。(ミニアルバムを示して) 私のアルバムの中に、こ

邦子 洋恵 邦子 若菜 邦子 若菜 邦子 洋恵 邦子
邦子 若菜 邦子 洋恵 邦子 若菜 邦子 洋恵 邦子

れが紛れ込んでたんだ。ほら、私たち、ずっと同じ部屋だったから。気がついたのはずいぶん前だけど、なんだか姉さんに渡しにくくて。

どうして？

(ミニアルバムを開いて) こういうのが入ってたから。

(受け取り、見て) そう。洋恵が持ってたの。なくしたのかと思ってた。

何？ どんな写真？

(見せる) 誰だかわかる？

(見て) お母さんと、嘘。もしかして、浦神さん？

そう。これは江ノ島。こっちは鎌倉ね。

これを見つけた時は、お義兄さんが亡くなる前だったのよ。だから、そんなの渡せないって思って、押し入れの奥にしま込んで、すっかり忘れてたの。

でも、この前、若菜ちゃんに浦神さんのこと聞かれて、思い出して。

おばさん、何も教えてくれなかったよね。

だって、詳しいことは知らないんだもの。私はその頃、調理学校の近くで一人暮らしをしてたから。でも、久しぶりに帰った時、姉さんがすごく痩せて

て、驚いた。どうしたのって聞いたら、浦神さんと別れたって。

(ミニアルバムを閉じて) ありがとう、持ってきてくれて。昔のことより、

今のことを考えよう。私は帰って話し合った方がいいと思うよ。

話し合うことなんかない。若菜ちゃん、住むところが見つかるまでお世話に

なるから、よろしくね。

え？ どういうこと？

日出男さんと喧嘩したんだって。

喧嘩なんかしてないよ。あいつがお風呂に入ってる間に、荷物をまとめて出

てきた。
何があつたの？

もう口にするのもイヤ。姉さん、説明して。

（若菜に）日出男さんが、スリランカの支社に転勤することになったんだつて。それで、洋恵と一緒に来てくれて頼んだんだけど。

来てくれ、じゃない。来い、って言ったんだよ。だから、店をやるのは諦め

ろつて。ああ、何度思い出しても腹が立つ。あんな男だとは思わなかった。

だからつて、いきなり家出はないでしょう？ 冷静に話し合わないと。

話す必要なんかないんだつて。もう離婚するつて決めたんだから。

離婚？ おばさん、本気で言つてるの？

決まつてるじゃない。ヒデくんはずつと、私に「やりたいことをやるべきだ」

つて言つてきた。でも、実はその後、「俺が許せる範囲で」つて言葉がつ

いてたんだよ。本当は心の狭い男だったの。若菜ちゃん、結婚相手は慎重に

選びなさいよ。結婚する前に、どんな男か、しっかり見極めないと。

私は大丈夫。多分、結婚はしないから。

どうして？ 付き合つてる人は？ まさか、あれからずつといないの？

いないよ。別に、引きずつてるわけじゃないからね。なんとなく、そんな気

になれないだけで。

本当に？

いけない。私、お風呂の水、出しっぱなし。若菜、見てきてくれる？

わかつた。

邦子・洋恵が去る。

若菜　　こういうわけで、おばさんがうちに居候することになったの。
有田　　ちよつと聞いてもいいかな？　さつき、おばさんが言ってた、「あれから」
つていうのは？

若菜　　三年前に、付き合ってた人に振られたの。好きな人ができたって。その人と

有田　　は結婚するつもりで、お互いの親にも会ってたんだけど。

有田　　そうなんだ。それはその、なんて言うか、残念でした。

若菜　　気を使わなくていいよ。今は全然平気だから。

有田　　だったらいいけど。

若菜　　次の日、浦神さんの家に行くと。

② 八月十一日夕、浦神信雄の屋敷、玄関。優花がやってくる。

優花　　白浜さん？　私の話、聞いてます？

若菜　　あ、ごめんなさい、あんまり驚いたから。今、なんて言いました？　浦神さ

優花　　んが映画会社を買った？

優花　　ええ。お金に物を言わせて、株を買い占めたんです。

若菜　　何のために？　まさか、映画に出るためにですか？

優花　　どうしてもやりたい役があるんですって。私も夫も止めたんですけど、全く

若菜　　聞く耳を持たないんです。

若菜　　もしかしたら、私のせいかもしれません。私が昨日、やれって言ったから。

優花　　あなたが唆したんですか？　だったら、あなたが止めてください。年寄りの

冷や水はやめておけて。

若菜
優花

それで、浦神さんは今、どちらに？
庭で演技の練習です。

若菜・優花が去る。
庭。浦神・道成寺・箕島が発声練習をしている。三人とも体操着を着て、台本を持っている。

浦神

じゃ、発声はここまでにして、台本をやりましょう。十五ページの、シーン二十三です。配役は、僕が小野田で、道成寺さんが土方、箕島さんが立川です。いいですか？ 用意、スタート。

道成寺

(浦神に)「一人で来るとは大した度胸だな。相手をしてやる。抜け」

箕島

「待ってください、土方先生、この人の顔は、前にどこかで見たとがあります」

浦神

「あれから五年も経つのに、よう覚えちよったな。長州藩士・小野田鉄馬じや」

箕島

「思い出した。叔父の診療所で、襲ってきたやつだ」

道成寺

「俺も思い出した。長州訛りの二人組だ。年かさの方はなかなかの腕だったが、若い方はただ振り回すだけ。まるでキャンキャン吠える小犬のようだった」

浦神

「人は変わる。今のわしが小犬かどうか、その目で確かめるがいい」

箕島

「土方先生！」

浦成寺

「立川、おまえは下がってる。小犬の始末は俺一人で充分だ」

浦神

「黙れ、土方！」

若菜が戻ってくる。

有田

（若菜に）今の、今度の映画のワンシーンだよな？ 浦神さん、この人たちと稽古してたんだ。（道成寺を示して）この人が土方役か。他に人がいなかったのかな。

若菜

台本の稽古だけじゃないよ。ジョギングも筋トレも始めたんだって。

有田

凄い行動力だな。映画会社を買って、体を鍛えて。

若菜

そう。凄い人だったのよ、浦神さんは。

そこへ、優花がやってくる。

優花

お義父様、白浜さんがいらつしやいました。

浦神

あれ？ もうそんな時間か。（道成寺・箕島に）じゃ、今日の稽古はここまでにしましょう。お付き合いました、ありがとうございます。

道成寺・箕島

お疲れ様でした。

道成寺

優花様、申し訳ございません。お客様のご案内は私の役目でしたのに。

優花

いいのよ。あなたはお義父様のお相手で忙しかったでしょう？

道成寺

すぐに着替えてまいります。箕島さん。

箕島

（浦神に）お茶はこちらにお持ちしますか？

優花

それも私に任せて。（浦神に）お義父様のおかげで、大忙しです。あー、おなかが空いた。今日の夕食は何かしら。

優花・道成寺・箕島が去る。

浦神 (誰もいない空間に) 仕方ないです。そのために、大きな買い物をしちゃいましたから。

若菜 浦神さん、誰に向かって、話してるんですか？

浦神 もちろん、白浜さんですよ。映画会社を買った話、もう聞きましたか？

若菜 ええ、とつても驚きました。まさか、私のせいですか？

浦神 そうですよ。あなたが「自分で作ればいい」って言ったから。

若菜 だから、いきなり映画会社を乗っ取るなんて。

浦神 やり方が強引だったのは認めます。でも、串本の映画に出るには、これしか

若菜 串本って？

浦神 僕の親友です。今度の映画で、初めて監督をやるんです。

若菜 つまり、浦神さんは、親友のデビュー作に出演したくて、映画会社を買った

浦神 んですか？

有田 (誰もいない空間に) 違いますよ。僕はどうしても小野田がやりたくて。

若菜 また一人でブツブツ言ってる。浦神さんには、誰が見えてるんだ？

浦神 凄いですよ、浦神さん。

若菜 何がですか？

浦神 浦神さん、一つ提案があります。私がこれから書く本は、浦神さんの過去じ

やなくて、今を題材にしたらどうでしょう？ あなたが映画に挑戦する姿を

浦神 本にするんです。

若菜 (誰もいない空間を見て、若菜に) ルポルタージュ？

浦神

若菜
浦神

若菜
浦神

若菜
浦神

浦神が去る。

有田
若菜
有田
若菜

そうですね。あなたが見たこと、感じたことを、私が書くんです。
（誰もいない空間を見て、若菜に）なるほどね。（若菜に）でも、僕が感じ
たことより、あなたが感じたことを書いた方が早くないですか？
そんなことをしたら、作者は私ってことになっちゃいます。
いいじゃないですか、それで。あなたは自分の本が出したいんでしょう？
だったら、堂々と、自分の名前を出すべきです。
ゴーストじゃなくて？
そうです。白浜若菜として。

よかった。よかったね、白浜さん。

何が？
何って、君の本が出せることになったんじゃないか。嬉しかっただろう？
すぐには嬉しいって気持ち湧いてこなかった。浦神さんの、前に進もう
とする力に、ただ圧倒されて。あの人は、私が思いつきで投げたボールを、
丁寧に受け取って、ピカピカに磨いて返してくれた。そんな人が、どう映画
に挑戦していくのか、見たいと思った。それを書きたいと思ったの。

有田 なるほどね。次はいよいよクラシックインか？
若菜 そう。前の日は、大騒ぎだったみたい。映画会社に、マスコミから電話がジ

有田 ヤンジャンかかってきて。
若菜 監督に聞いたよ。結局、まとめて記者会見をやることになったんだろう？

有田 私も、その記者会見に出た。意地の悪い質問ばかりだった。「役者の仕事をバカにしないか？」「会社を乗っ取るなんて、傲慢すぎないか？」。もちろん、こんな言い方はしてなかったけど。
有田 浦神さんは、よくも悪くも有名人だもんな。で、撮影はうまく行ったの？

八月二十一日昼、映画のスタジオ、楽屋の前の廊下。串本・和歌山がやってくる。

串本 白浜さん、衣裳はありましたか？

若菜 それが、まだ見つかからないんです。

串本 文太、どういう手違いなんだ。浦神さんは映画に出るのが初めてなんだぞ。

和歌山 おまえが面倒を見ろって、散々言っただろうが。

串本 そんなこと言われても、衣裳までは手が回りませんよ。

和歌山 もういい。俺が直接、衣裳部に行ってくる。

和歌山 監督がですか？他にやるべきことがいっぱいあるでしょう。

若菜 串本さん、私が行きますから。和歌山さんも、スタジオに戻ってください。串
本 すみません、いろいろと。文太、おまえは倉庫へ行つてこい。

串本・和歌山が去る。

有田 何が起きてるんだ？

若菜 楽屋に用意されてた衣裳が間違つてたの。衣裳部屋にも、他の人の楽屋にも

有田 見当たらなくて。結局、倉庫の、使つてない衣裳の中に紛れ込んだ。

若菜 監督が「いろいろと」つて言つてたよね？ 他にも何かあったの？

有田 最初は、撮影所の入り口で足止め。守衛さんに、すぐに誰かが迎えに来るつ
て言われたのに、一時間も待たされた。

若菜 本当に？ ひどいな。

有田 それから、スタジオに行つて、スタッフさんに挨拶をしたんだけど、相手を
してくれたのは串本さんと和歌山さんぐらい。ほとんどの人は、浦神さんと
目を合わせようとしなかった。その次が衣裳の間違い。その次が。

浦神がやってくる。衣裳を着てスリッパを履いている。反対側から、由良がやってくる。

浦神 白浜さん、やつぱり見当たりません。

若菜 そんな。

由良 浦神さん、準備はよろしいでしょうか？ あと三十分でリハーサルですが。

若菜 すみません。今度は履物が見つからないんです。

由良 あなた、衣裳部の新人？

浦神 違います。僕の知り合いの作家さんで、白浜さんです。(若菜に) こちらは、プロデュースの由良さん。
由良 で、履物がどうかしたんですか？
若菜 なくなっただけです。多分、私たちがスタジオへ行ってる間に、誰かが持っていったんです。
由良 何のために？
若菜 嫌がらせですよ。浦神さんは歓迎されてないみたいなので。
由良 だからって、そんな子供っぽいこと、するかしら。
浦神 白浜さん、考えすぎですよ。(由良に) もう一度、よく探してみますので。

由良が去る。

有田 いや、どう考えても嫌がらせだろう。
若菜 私もそう言った。でも、浦神さんは。
浦神 怒る前に、深呼吸しましょう。大きく息を吸って、吐いて。(と深呼吸)
若菜 何、呑気なことやってるんですか。悔しくないんですか、浦神さんは。
浦神 僕は、お金の物を言わせた。歓迎されなくて当然です。
若菜 これぐらいのことで、へこんでる暇はありません。勝負はまだ、これからなんです。僕は負けませんよ。何が何でも、この映画に出るって決めただけから。
若菜 わかってます。私も全力で応援します。
有田 それで？ リハーサルには間に合ったのか？

そこへ、和歌山がやってくる。小野田の履物を持っている。

和歌山 浦神さん、ありましたよ！ カツラが置いてある部屋の、ゴミ箱の中に。

若菜 どうしてそんなところに？

和歌山 いいから行きましょう。これ以上、南部さんを待たせるわけにいきません。

浦神・和歌山が去る。

有田 あちやー、大変だな。初日から、あの南部さんと当たったのか。僕と同じだ。

若菜 有田さんも？

有田 南部さんには、テストの段階から苛められたよ。わざとセリフを間違えたり。

若菜 それ、浦神さんの時もそうだった！

有田 目に浮かぶな。遅れて行った時、なんて言われた？（眉間にシワを寄せて）

有田 「ホテル業界の帝王だか何だか知らないが、映画界じゃ新米だろう。俺を待

たせるなんて、十年早い」。こんな感じ？

若菜 うわ。似てる。

有田 「履物が見つからなかったんだって？ ひょっとして、誰かに隠されたんじ

若菜 やないの？ 俺も若い頃はよくやられた。生意気だったからな、俺は」

有田 本場にそっくり。そのまま続けて。

有田 え、僕が南部さんを？

スタジオ。浦神・仁一・串本・由良・和歌山がやってくる。

串本

(浦神・有田に) じゃ、このシーンの段取りを説明します。ここは函館にある旅籠の二階です。宇部が窓辺に座って、酒を飲んでいる。すると、小野田がこっちの襖を開けて、飛び込んでくる。会話があって、最後は小野田が飛び出していく。

有田

了解。
じゃ、とりあえず、通して一回やってみますか。

和歌山

(浦神・有田に) それじゃ、お二人とも、スタンバイをお願いします。

仁一

(浦神に) お父さん、頑張ってくださいね。

浦神

仁一さん、来てくれたんですね。会社の方はいいんですか？
このシーンだけ見たら、すぐに戻ります。期待してますからね。

若菜

あんまりプレッシャーをかけないでください。(浦神に) 落ち着いて、練習の通りにやればいいんです。

有田が座る。浦神が部屋の外に立つ。

和歌山

浦神さん、準備はいいですか？ 始めますよ。シーン十二、テスト。
用意、スタート。

串本

「宇部！ 宇部！」

有田

「どねえしたんじゃ、小野田」

浦神

「土方じゃ。その旅籠に土方が来ちよる」

有田

「ほりゃあ何かの見間違いじゃろう。やつは今、五稜郭におるはずじゃ」

浦神 「じゃけど、わしは見たんじゃ。やつが連れと二人で入るところを」

有田 ……

和歌山 南部さん、「沖田か？」です。

有田 知ってるよ。でも、今の浦神さんの芝居じゃ、そのセリフは出せないよ。

浦神 すみません。

有田 テストだからって、気を抜かないでさ、本気で行こうよ。

浦神 わかりました。

串本 それじゃ、もう一回最初から行きましょう。

若菜 （浦神に歩み寄って）あの人、わざと意地悪してますよ。どうして抗議しないんですか？

浦神 僕は役者です。役者は演技で戦うしかないんです。

有田が座る。浦神が部屋の外に立つ。

和歌山 浦神さん、行きますよ。シーン十二、テスト。

串本 用意、スタート。

浦神 「宇部！ 宇部！」

有田 「どねえしたんじゃ、小野田」

浦神 「土方じゃ。その旅籠に土方が来ちよる」

有田 「ほりゃあ何かの間違いじゃろう。やつは今、五稜郭におるはずじゃ」

浦神 「じゃけど、わしは見たんじゃ。やつが連れと二人で入るところを」

有田 「わしには信じられん」

浦神 （有田の胸ぐらを掴んで）「わしの目に狂いはない。新選組の隊士で、名は

有田 確か、立川」

有田 「あの、滅法足の速い男か」

浦神 「宿の女中の話によると、土方は女子の客を訪ねてきたようじゃ。新選組の副長ともあるう者が、戦の最中に逢い引きとは笑わせる」

有田 「おまえ、やつを斬るつもりか」

新宮 「もちろんじゃ。あの時、やつが来なければ、わしらは沖田を斬ることができた。徳山さんの仇を討つことができたんじゃ」

有田 「その気持ちはわしにもようわかる。じゃけど、おまえに土方は斬れん」

和歌山 南部さん、「斬れるか？」です

浦神 (南部に)「ほうかもしれん。じゃけど、おまえが手伝うてくれたら」

有田 「戦の最中に私闘はいかん。わしらの隊の者を集めて、その旅籠を取り囲むんじゃ」

浦神 「斬らずに生け捕りにするっちゅうんか。わしは反対じゃ」

有田 「土方は手強い。あの時、おまえも足を斬られたじゃろうが」

浦神 「あの時の痛みはよう覚えちよる。次に会うた時は必ず斬る。わしはそう誓うたんじゃ」

有田 「待て、小野田」

浦神が走り出す。

串本

有田

カット！

浦神さん、参りましたよ。とても素人とは思えない。本当は前にどこかでや

浦神 　　つてたんでしよう？
実は舞台を少しだけ。

有田 　　やっぱりね。俺がセリフを変えても、ちゃんとアドリブで返してきた。いや、大したもんだ。

和歌山 　　それじゃ、今からセッティングに入りますので、しばらく楽屋でお待ちください。
有田 　　了解。

浦神・仁一・串本・由良・和歌山が去る。

有田 　　どうだった？　ここまでやらせておいて、貶すとかナシだからね。

若菜 　　完璧。有田さんも、南部さんに同じことをされたのね？

有田 　　全く同じことを。僕も必死に、アドリブで対抗したんだ。

若菜 　　それから三時間後。無事に本番が終わって。

浦神・串本が戻ってくる。

浦神 　　白浜さん、ありがとう！

浦神が両手を広げ、若菜に抱きつきそうになるのを、串本が止める。

串本 　　待て待て、落ち着け。

有田 　　何だ何だ何だ？

串本 白浜さん、僕からも礼を言います。こいつに「映画に出る」って発破をかけてくれたそうですね。おかげで、こいつと一緒にやれることになりました。浦神 やったな、串本！（両手を広げる）

串本 （逃げて）やめろって、誤解される。（若菜に）こいつ、おかしなクセを持つてましてね。興奮すると、近くの人に抱きついて、キスをする。

有田 気持ち悪いな。

串本 （若菜に）とにかく、これからもよろしくお願いします。何かあったら、さつきみたいにな、こいつを励ましてやってください。

若菜 あの。お二人は、なぜ、そんなに仲がいいんですか？

浦神・串本 え？

若菜 親友だつてことは聞いてましたけど、ここまでとは思ってなくて。ずいぶん年が離れてるのに、串本さん、浦神さんのことを「こいつ」って。

串本 いやあ、こいつが、そう呼べつてうるさいんですよ。年なんか関係ない、遠慮するなつて。（浦神に）なあ？

若菜 いつ、どこで知り合つたんですか？

浦神 初めて会つたのは、いつだったかな。どうも最近、物忘れがひどくて。

串本 浦神さん、そろそろ戻りましょう。明日撮るシーンの台本、書き直したんで、一緒にチェックしてほしいんですよ。（若菜に）失礼します。

浦神 （若菜に）本当にありがとうございます。

浦神・串本が去る。

有田 なんだ、あのデコボココンビ。

若菜

有田
若菜

有田
若菜

有田
若菜

（浦神を見送って）私がアルバイトしてるパン屋さんに、ちよつと変わったお客さんがいてね。私が「ありがとうございました」って言うと、必ず、ニッコリ笑って「ありがとう」って返してくれるの。

どんな人？

若い男の人。顔は覚えてるけど、名前までは知らなくて。その人、玉子のサンドイッチとか、ゆで玉子が載ってるデニッシュとか、とにかく玉子が入ってるパンばかり買っていくの。だから、私は、タマさんって呼んでるんだ。もちろん、心の中で。

あんまりいい呼び名じゃないと思うよ。で、どうして今、その話を？

浦神さんに「ありがとう」って言われた時、ふと、その人のことを思い出したんだ。どうしてかはわからないけど。

それで？ 撮影は順調だったの？

本番で、浦神さんは一度もNGを出さなかった。初日も、次の日も、そのまた次の日も。そして、五日目の夕方。

① 八月二十五日夕、スタジオ前の廊下。由良がやってくる。

由良

あら、白浜さん、今来たの？ 今日遅かったのね。

若菜

アルバイト先の手が足りなくて、どうしても出てくれなくて頼まれたんです。

由良

浦神さん、今日も絶好調よ。おかげで撮影スケジュールは早めに進んでる。

若菜

今日は、衣裳がなくなったりしてませんよね？

由良

ないない。実はね、初日の夜に、串本くんがスタッフ全員を一喝したのは、

若菜

文句があるなら、俺に言えって。まあ、ケチな嫌がらせがなくなったのは、

由良

それだけが理由じゃないと思うけど。

若菜

浦神さんが認められたってことでしょか？

由良

少なくとも、あの人が本気だったことは伝わったんじゃない？ こっちとしても、代役を探す手間が省けたし。

若菜

代役って？

由良

聞いてない？ 小野田の役は、本当は、違う人がやるはずだったのよ。串本

若菜

くんの親友が。

由良

なんていう人ですか？

若菜

新宮弘樹。三週間前に、

若菜

交通事故で亡くなったの。

若菜

新宮？ 亡くなった？

若菜

亡くなった？

有田 　　そうか。この時、初めて、新宮って名前を聞いたんだ。
若菜 　　その瞬間、浦神さんの声が蘇った。初めてインタビューをした時、あの人が
言った言葉が。

有田 　　「僕の本当の名前は新宮弘樹」。どういうことだ？

若菜 　　この時は、何もわからなかった。考えてる余裕がなくて。

由良 　　そろそろ次のシーンが始まるよ。浦神さんの見せ場だから、楽しみにしてて。

若菜 　　あ、携帯の電源は切ってね。

由良 　　はい、今、切ります。（携帯を取り出して、画面を見て）あれ。

若菜 　　どうかした？

若菜 　　何度か、電話がかかってきてたみたいで。失礼します。（去る）

スタジオの中。浦神・佐野慎吾がやってくる。佐野は土方の衣裳を着ている。

佐野 　　「小野田、ゆきはどこにいる」

浦神 　　「戦より女子の方が大事か。全く情けない男じゃのう」

佐野 　　「そうかな？ 惚れた女を見捨てる方が百倍情けないと思うが」

浦神 　　「空威張りはやめにせえ。今のおまえには何も無い。近藤も死んだ。沖田も

死んだ。残っちはよめるのはあの女子だけじゃ。ほいじゃけえ、失いとうないん

じゃろうか」

佐野 　　「わかってねえな。おまえにはまるでわかってねえ」

浦神 　　「何がじゃ」

佐野 　　「近藤さんはここに居る。総司もここに居る。俺には二人の姿が見える」

浦神 　　「ほりゃああ幻じゃ。幽霊じゃ」

佐野 「違う。魂だ。俺には二人の声が聞こえる。トシ、前に進めって声が」
浦神 「負け犬が偉そうな口を叩くな！」

浦神が佐野に斬りかかる。佐野がかわして、浦神に斬りかかる。浦神が避ける。

佐野 「俺は武州日野の生まれでな。大人になるまで、海つてもものを見たことがな

かったんだ」

「いきなり何の話じゃ」

浦神 「波つてやつはすげえよな。朝から晩まで、休むことなく、打ち寄せる。砂

浜でも、岩場でも、ただひたすら。男つてもものは、波のように生きるべきだ。

そう思わねえか？」

浦神 「黙れ！」

浦神が佐野に斬りかかる。激しい斬り合い。佐野が浦神を斬る。浦神がひざまずく。
そこへ、仁一・串本・由良・和歌山がやってくる。

カット！ オーケイ。今の、いただきます。

（浦神・佐野に）お疲れ様でした。

（佐野に）よかった！ 佐野くん、最高だったよ！

佐野 そうですか？ 僕、ちよつと、殺陣を間違えちゃって。浦神さん、すみませ

んでした。

いや、おかげで、僕も必死になりました。

浦神 それは僕のセリフですよ。浦神さんの動きが速いから、負けるもんかと思っ

和歌山

仁一

浦神

仁一

有田

仁一が去る。そこへ、若菜がやってくる。

て。こんなに熱くなれたのは初めてです。ありがとうございます。

次はシーン六十七です。皆さん、準備をお願いします。

（浦神に）お父さん、僕は今、猛烈に感動しています。お父さんは凄い。

仁一さん、毎日来てくれるのはうれしいですけど、あなたは社長代理なんですから。

すぐに会社に戻ります。でも、明日も必ず来ますから。

ファンか？ ファンなのか？

若菜

浦神

若菜

浦神

若菜

浦神

若菜

浦神

若菜

浦神さん。

白浜さん、今の、見てくれました？

ごめんなさい。本番が始まる前に、叔母から電話があつて。私、急いで帰らないと。

何かあつたんですか？

母が出先で倒れたらしいんです。母は前から重い病気に罹っていて。

わかりました。行きましょう。

浦神さんですか？

今日の出番は終わりです。着替えてる暇はないな。このまま行きましょう。

（由良たちに）お疲れ様でした。

若菜・浦神が去る。

由良 串本くん、浦神さんの演技を見てると、新宮くんを思い出さない？
和歌山 僕も全く同感です。しゃべり方や動き方がよく似てますよね。
佐野 その人、クランクインの前に亡くなっただけですよね？
串本 ええ。でも、土方のセリフじゃないけど、新宮はここにいます。僕にはあいつの姿が見えます。

② 串本・由良・和歌山・佐野が去る。
八月二十五日夕、若菜の家。若菜・浦神・邦子がやってくる。

邦子 さあ、どうぞ。

若菜 お母さん、寝てなくて、平気なの？

邦子 大袈裟なのよ、洋恵は。病院に行つて、注射してもらったら、すぐによくなつた。でも、念のために、今日は家で休むことにしたの。

若菜 だったら、すぐに着替えて、ベッドに入って。

邦子 そういうわけには行かないわよ。せつかく浦神さんが来てくださっただから。(浦神に) その格好で電車に乗ったんですか？

浦神 いや、車です。電車に乗ると、怒られるんで。

若菜 (邦子に) ベンツ。しかも、運転手つき。私も乗せてもらっちゃった。やっぱり、大企業の社長さんともなると、違うのね。お久しぶりです、浦神さん。

浦神 え？ 僕は前にあなたとお会いしたことがあるんですか？

若菜 信じられない。母のこと、覚えてないんですか？
浦神 お顔はどこかで見た記憶があるんですが。

若菜
浦神

若菜

浦神

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

白浜邦子。結婚する前は、椿邦子。

ダメだ。思い出せない。ほら、前に言ったでしょう？ 地下室の階段から落

ちてから、記憶が混乱してるって。

それは知ってますけど、幼稚園の友達ならともかく、恋人を忘れるなんて。

恋人？ 白浜さんのお母さんが？

仕方ないですよ。もう三十三年も前の話なんだから。

でも、お母さんは覚えてるじゃない。(浦神に) 浦神さんにとっては、母を

捨てたことなんて、些細な出来事だったんでしょね。

違うのよ、若菜。あなたは誤解してる。

誤解って？

私は捨てられてなんかいない。別れようって言い出したのは、私の方なの。

嘘。

浦神さんは私に結婚しようって言うて言うてくれた。私もそうしたいと思った。で

も、うちは小さなクリーニング屋だったからね。浦神さんの家とは身分が違

う。浦神さんのご両親だけじゃなくて、うちの両親にも反対された。苦勞す

るだけだった。

それで、諦めたの？

笑われるかもしれないけど、私たち、駆け落ちするつもりだったのよ。でも、

家を出る時、父に見つかっちゃって。叩かれるかと思ったら、ポロポロ泣き

出しちゃって。それで初めて気がついたの。ここまで育ててくれた両親を裏

切るわけには行かないって。

どうして先には言ってくれなかったの？ 私ったら、すっかり勘違いしちゃっ

て。

邦子 若菜 浦神 若菜 浦神 若菜 邦子 浦神 若菜 浦神 若菜 邦子 浦神 若菜 浦神 若菜 邦子 浦神 若菜 浦神 若菜

私は捨てられたなんて、一言も言っていないよ。

浦神さん、ごめんなさい。(頭を下げる)

どうして僕に謝るんですか？

だって、私、今までさんざん無礼な態度を取ってきたから。

そうかな。僕はそうは思いませんでしたけど。

最初にインタビューした時も、いきなり怒って、帰っちゃったし。

あれは、僕が突然、おかしい話をしたから。でも、僕のことをそんなふう

思っていたなら、どうしてゴーストライターを引き受けたんですか？

一番は、母に新しいことに挑戦してみろって言われたから。

二番は？

浦神信雄がどんなに悪いやつか、暴いてやろうと思っただけです。

本当はそっちが一番だったんじゃないですか？

すみません、浦神さん。この子だったら、いろいろご迷惑をおかけしたみたい

ですね。

そんなことはありません。僕は若菜さんのおかげで、役者をやろうって決心

できたんです。あっ！

どうしたんですか？

(邦子に)あなたは三十三年前、江ノ島に行きませんでしたか？

思い出したんですか？

(邦子に)鎌倉にも行きましたよね？ それから、茅ヶ崎にも。

行きましたよ。あなたはサザンオールスターズの大ファンだったから、ドラ

イブはいつも湘南でした。

あの時の写真は今でも全部持っています。

有田
若菜

どうして
その日の
夜？

① 八月二十五日夜、若菜の家。岩代・洋恵がやってくる。

洋恵 ただいま、若菜ちゃん。旭くと、そこでバツタリ会っちゃって。

岩代 (若菜に) おまえがちつとも連絡してこないから、様子を見に来たんだ。

若菜 撮影は順調に進んでるよ。もちろん、取材も。

岩代 言いたいことはそれだけか？ 今、洋恵さんに聞いたぞ。自伝じゃなくて、ルポルターージュを書くことになったんだって？

洋恵 (若菜に) ごめんね。またフライングしちゃった。

若菜 (岩代に) ごめんなさい。すぐに伝えなきやいけなかったのに、忙しくて。

岩代 今さら謝っても遅い。勝手に突っ走りやがって。おまえ、この仕事を一人で

受けたつもりか？ 言っとくけど、うちの会社にも、おまえを切る権利はあ

るんだからな。ちよつと浦神さんに気に入られたからって、調子に乗るな。

洋恵 何も、そこまで怒らなくても。

若菜 悪いのは私だから。(岩代に) すみませんでした。これからはちゃんと報告

岩代 します。

洋恵 わかればいいんだけどさ。

若菜 (若菜に) さつきは、これで若菜ちゃんの名前で本が出せるって喜んでたのよ。

岩代 洋恵さん、それもフライングです。
洋恵 若菜ちゃん、姉さんは？
若菜 さつき、誰かから電話が来て、ちよっと出てくるって。
洋恵 誰かって誰？ 図書館の人？

そこへ、邦子・日出男がやってくる。

邦子 よかった。洋恵、帰ってたのね。

洋恵 (日出男に) 何よ、こんな時間に。

日出男 お義姉さんからメールをもらったよ。明日から店を始めるんだって？

岩代 明日？ もうそこまで進んでるんですか？

日出男 ええと、君は。

若菜 私の幼なじみです。この人のことは気にしないでください。

邦子 (岩代に) 正式なオープンは明後日よ。明日は、内輪だけの試食会なの。(

洋恵 洋恵に) そこに、日出男さんにも、ぜひ来てほしいと思ってる。

洋恵 余計なことしないでよ。その人と私は、もう関係ないんだから。

日出男 そう言うだろうと思ってる、これを持ってきた。(鞆から封筒を取り出す)

洋恵 何よ。

日出男 離婚届だ。僕の分は、署名も捺印も済んでる。(封筒を机に置く)

邦子 (洋恵に) 本当は、それを私からあなたに渡してくれって頼まれたの。でも、

洋恵 直接、会って話した方がいいと思ってる。

日出男 オークイ。(封筒を取り上げて) お店が落ち着いたら、出しに行く。ちよっと待て。そんなにあっさり受け取っていいのか？

洋恵

は？ 受け取っちゃいけないの？

日出男

普通だったら、こういう時は、迷ったり、悩んだりするんじゃないのか？

洋恵

何言ってるの？ (封筒を示して) これがあなたの結論なんでしょう？

日出男

(封筒を取って) それは、君が勝手に出ていったりするからだ。少しは反省したらどうなんだ。

洋恵

(封筒を取って) 勝手なのはどっちよ。自分の都合ばかり押しつけて。

日出男

夫婦っていうのは一心同体だろう。僕の都合も君の都合もあるもんか。(封筒を取ろうとする)

洋恵

(逃げて) 子供みたいなこと言わないで。いくら夫婦だって、譲れないものはあるんだから。

邦子

(封筒を取って) 二人とも落ち着いて。要するに、日出男さんは、洋恵と話し合いたいのね？ そのきっかけが欲しくて、こんなものを。(机に置く)

日出男

違いますよ。僕はただ、洋恵に、我慢の限界だって伝えたくて。

岩代

素直じゃないな。あ、すみません。

若菜

お婆さん、そろそろ家に帰ったら？ せっかく迎えに来てくれたんだから。

洋恵

そうね。ヒデくんが、お店に賛成してくれるなら、帰ってもいいけど。

日出男

賛成すれば、スリランカに行ってくれるのか？

洋恵

スリランカに行ったら、お店ができないでしょうが。結局、自分の思い通りにしようとするんだから。

日出男

それは君だっけと同じだろう。

洋恵

もういい。話し合う気がないんだったら、帰って。

洋恵

洋恵が去る。

日出男

(封筒を取り、クシヤクシヤにして)クソツ。(邦子に)あ、失礼。

邦子

また日を改めて、会いに来たら？ 私からも、よく言っておくから。

日出男

あいつが素直に聞くとは思えません。何をやっても無駄ですよ。

邦子

そんなことない。諦めなければ、きっと仲直りできる。

日出男

前向きだな、お義姉さんは。

邦子

明日の試食会は？ 来てくれる？

日出男

いえ、遠慮しておきます。

岩代

俺も仕事があるんですよ。残念だけど。

有田

おまえは誘われてないだろう。

邦子

日出男さん、待って。そこまで送る。

邦子・岩代・日出男が去る。

有田

日出男さん、まだ反対だったんだね。お母さんがお店をやること。

若菜

おばさんとの喧嘩で、余計、賛成する気になれなかったんだと思う。

有田

そう言えば、お店の名前は決まったの？

若菜

つばき食堂。おばさんは、最後までトラットリアにこだわってたけど。

有田

つばきって、お母さんたちの旧姓だよな。ちよっとシンプルすぎるかな。

若菜

次の日の夜。

② 八月二十六日夜、邦子のレストラン。邦子・浦神がやってくる。

浦神 若菜 (邦子に) すみません、こんな遅い時間になっちゃって。
(邦子に) 撮影が伸びたんだ。南部さんがアドリブを連発して、收拾がつか

なくなっちゃって。

(邦子に) あの人はとても自由なんです。

今日のお客様は浦神さんだけです。どうかごゆっくりなさってください。料

理が全部出し終わったら、シェフを紹介しますね。

シェフはあなたの妹さんなんですよね？

そうです。つい最近まで青山のレストランで働いてたんですけど、独立して、

私と二人でこの店を作ったんです。

そのお年でレストランを始めるなんて、凄い決断ですね。

ええ、まあ。

お母さん、病気のこと、浦神さんに話していい？

いいよ。今、お水をお持ちしますね。

邦子が去る。

若菜 浦神 浦神さん、母は膵臓ガンなんです。見つかったのはつい最近で。

そんな人が、普通に働いてて、いいんですか？

膵臓の手術は難しいので、薬で治療することになったんです。同じ病気で、

十年以上、普通に生活してる人もいますそうです。

でも、あまり無理はしない方が。

私もそう言ったんですけど、母は聞く耳を持たなくて。自分で食堂をやるの
が、昔からの夢だった。そう言つて、三十年以上も勤めた図書館を辞めて、

浦神 若菜

この店を開いたんです。

そこへ、邦子がやってくる。手にはコップを載せたお盆。

邦子

お待たせしました。メニューは「シェフのお薦めコース」をご用意してます。

浦神

浦神さんは何か食べられないものがありますか？

邦子

皆無です。それより、ご病気のことで、お聞きしました。病気に負けずに、このお店を始めたこと、凄い勇気だと思います。

邦子が去る。

若菜

私もそう思います。浦神さんのこと、尊敬してます。

浦神

いや、僕は運がよかったですよ。心身ともに健康だったし、映画会社を買

若菜

うお金もあつた。映画に出られたのは、僕の実力じゃありません。

浦神

でも、撮影が始まってからは？ 浦神さんはプロが驚くような演技をした。

浦神

クラインクインから今日まで、いまだにNGを出してない。

若菜

初心者が迷惑をかけるわけには行きませんか。私は知ってます。母より年上だ

浦神

そのために浦神さんがどれだけ努力したか、私は知ってます。母より年上だ

若菜

白浜さん、僕は何歳に見えますか？

浦神

そうですね。見た目は五十五歳。でも、演技をしてる時は私のちよっと上。

若菜

三十二、三歳かな。

浦神
若菜

本当ですか？ 僕に気を遣って、少なめに言ってみませんか？
いいえ、本当にそう思います。浦神さんを見ると、映画の中の土方のセリフを思い出します。

浦神

「男つてのは、波のように生きるべきだ」ですか？

若菜

映画に出るって決めてからの浦神さんは、一瞬も休んでない。ひたすら、演技のことだけ考えてる。土方に負けないぐらい、カッコいいです。

浦神

（箱を差し出して）白浜さん、よかったら、これをもらってください。

若菜

何ですか、これ？

浦神

イヤリングです。気に入ってもらえればいいんですけど。

若菜

どうしてこれを私に？

浦神

僕は白浜さんの言葉で、映画に出るって決めた。そのお礼です。それと。

若菜

それと、何ですか？

浦神

（誰もいない空間に）緊急事態？ 悪いけど、後にしてくれませんか？

若菜

浦神さん、誰に向かって、話してるんですか？

浦神

いや、その、会社から電話がかかってきて。（スマートフォンを出して）今、忙しいんです。一時間後にかけて直してください。（若菜に）電話のことは忘れて、話の続きをしましょう。（誰もいない空間に）うるさい！（若菜に）

若菜

またかかってきました。何か重大な事件が起きたみたいです。ちょっと外で話してきます。

浦神が去る。

有田

わざとらしいな。電話なんて嘘だろう？ また、道成寺さんが言ってた、ア

若菜
有田
若菜

ルさんって人と話してたんじゃないのか？
そうかもしれない。でも、何か大変なことが起きたのは確かだと思う。
緊急事態って言ってたよな？ どこで、何があったんだ？
浦神さんは、何も説明してくれなかった。五分後、浦神さんが戻ってきた。
さつきとは別人みたい、深刻な顔をして。

浦神が戻ってくる。

若菜
浦神

会社の方、大丈夫そうですか？

それがその、僕がすぐに行かないとまずいよう。申し訳ありませんけど、
これで失礼します。

そうですか。残念ですけど、仕方ないですね。

白浜さん、もし僕の身に何かあっても、本は必ず書き上げてください。

何かあってもって、どういうことですか？

たとえば、死んだりとか。

浦神さん、そんな縁起の悪いこと、言わないでください。

仮定の話ですよ。僕はあなたに本を出してほしい。一日でも早く、プロの作

家になってほしいんです。

本を一冊出したからって、すぐにプロになれるとは限りませんよ。

そんなの、出してみなくちゃわからないでしょう？ 玉子の殻を割らなけれ

ば、目玉焼きは食べられない。

え？

やってみくちやわからないってことですよ。

若菜・有田
浦神

若菜 そうですね。目玉焼きが食べたかったら、まずは玉子の殻を割らなくちゃ。
浦神 そう、その意気ですよ。じゃ。
若菜 浦神さん、またすぐに会えますよね？
浦神 ええ、必ず。
若菜 絶対ですよ。いいですね？
浦神 絶対にあなたに会いに行きます。僕は嘘はつきません。

そこへ、邦子がやってくる。

邦子 浦神さん、どうかなさったんですか？
浦神 今すぐ会社に行かなければなりません。せつかくお招きいただいたのに、一口も食べなくて、申し訳ありません。
邦子 いいえ、この店を見てもらえただけで、うれしいです。
浦神 明日から、頑張ってください。くれぐれも無理をしないで。
邦子 浦神さんも。

浦神が去る。

邦子 どうしたの？ そんなに悲しそうな顔をして。
若菜 何でもない。
邦子 仕方ないわよ。浦神さんには大勢の社員に対する責任があるんだから。
若菜 (箱を開いて) 浦神さん、これを私にくれたの。
邦子 (箱を見て) あら、貝殻のイヤリング？

若菜 (イヤリングを取り出して) これをつけたら、聞こえるかな。波の音。

邦子が去る。

有田 どうしてあんなことを聞いたんだ? 「また会えますか」なんて。

若菜 わからない。でも、このまま、二度と会えないような気がして。

有田 待てよ。この日はいつだっけ?

若菜 八月二十六日よ。

有田 それじゃ。

若菜 私は、お店の掃除を手伝って、お母さんとおばさんは明日の準備を始めて。

先に帰って行って言われて、お店の外に出たら。

③ 八月二十六日夜、レストランの外。若菜のスマートフォンが鳴る。

若菜 (出て) もしもし、旭くん? どうしたの?

遠くに岩代がやってくる。スマートフォンを持っている。

岩代 若菜。おまえ、今、どこにいる。

若菜 お母さんの店。これから帰るところ。

岩代 いいか、落ち着いて聞けよ。ついさっき、会社から連絡が来たんだ。浦神さ

んが、事故に遭ったって。

若菜 え?

車が暴走し、何かにぶつかる音。

① 八月二十六日夜、病院の病室。浦神がベッドで寝ている。その周りに、優花・道成寺・箕島が立っている。そこへ、仁一がやってくる。若菜・岩代がベッドに歩み寄り。

仁一

優花、岩代さんと白浜さんがいらつしやつたよ。

岩代

（優花に）突然、押しかけて、申し訳ありません。白浜さんが、浦神さんに一目だけでもお会いしたいと言いました。

優花

（若菜に）どうぞ。

若菜がベッドに歩み寄り、浦神の顔にかかった白布をめくる。

仁一

家のすぐ近くで、車に撥ねられたんです。犯人は父をそのままにして、逃げました。救急車が駆けつけた時には、もう心臓が停まっていたそうです。

岩代

犯人の行方は？
わかりません。警察の話によると、現場にはブレーキの痕がなかったそうです。つまり、犯人は父をわざと轢いた可能性があるんです。

仁一

それはつまり、殺そうとしたってことですか？ でも、一体誰が。

優花

義父はたくさんの人に憎まれていました。数え上げたらキリがありません。あの。

若菜

岩代 若菜 仁一 若菜 岩代 若菜 岩代 仁一 道成寺 岩代 道成寺 優花 箕島 道成寺 箕島 優花 岩代 優花

何だい、白浜さん。

（仁一に）事故が起きる一時間前まで、浦神さんは私の母のレストランにいました。そこに会社から電話がかかってきたんです。すぐに来てほしいと。相手は名前を名乗ったんですか？

それはお聞きしませんでした。浦神さんは慌てて店を出ていきました。でも、その前に、気になることを仰ったんです。気になることって？

「僕の身に何かあったら」って。浦神さんはご自分の命が狙われていることに気づいていたのかもしれない。

仁一さんはどうです？ 浦神さんから何か聞いてませんか？

いや、僕は何も。

仁一様、覚えていらっしやいますか？ 半月ほど前に、ベランダの植木鉢が

落ちましたよね？ 旦那様の頭の上に。

ああ。幸い、父に怪我はなかったけど。

あの日はいいお天気で、風も吹いてませんでした。なぜ植木鉢が落ちたのか、

原因はわかりませんでした。

あなたは、誰かが落としたりして言いたいのか？

道成寺さん、あのことは？

あのことって？

白浜様と岩代様が初めて屋敷にいらっしやった日です。旦那様のお姿が見え

なくて、お探ししていたら、地下室にいらっしやったんですよね？

その話は僕も聞きました。地下室の階段から落ちて、頭を打ったって。

（箕島に）それも、誰かが突き落としたりして言うのか？ そんなことはありえ

若菜
優花

仁一
若菜

岩代
仁一
優花

優花
仁一

道成寺
岩代
道成寺

仁一
道成寺

ません。どうして断言できるんですか？

だって、もしそうだとしたら、犯人は浦神家の人間だってことになってしまいます。

僕は父を殺してない。

本当ですか？

本当に決まってるだろう。仁一さんがそんなことをするはずがない。

嘘だ。あなたは僕を疑ってる。

バカなことを言わないで。それはあなたの思い過ごしよ。

確かに、僕が疑われても仕方がないと思う。僕は父を憎んでいた。子供の頃

から無能扱いされて、この年になっても秘書しかやらせてもらえない。「おまえに社長は無理だ」「跡を継がせる気はない」と何度も言われた。

あなた、もうやめて。

優しい言葉をかけてもらったことなんか、一度もなかった。僕にはこの人が

自分の父親だとはどうしても思えなかった。

旦那様はご自分がされたことを仁一様になさっただけです。

それはどういうことですか？

以前、旦那様からお聞きしたことがあります。旦那様のお父様は旦那様以上

に厳しい方だったそうです。殴る蹴るなど当たり前でした。「子供の頃は憎

いと思っていたよ」そう、旦那様は仰っていました。「でも、今は感謝して

いる。父のおかげで、私の心は鋼のように鍛えられた」と。

だから、僕にも厳しくしたって言うのか？

ええ、ご自分の跡を継がせるために。

若菜 仁一さん、教えてください。あなたは本当に何もしてないんですか？
仁一 僕は。

スマートフォン呼び出し音。

仁一 失礼。(スマートフォンを取り出して) はい、浦神仁一です。……何ですつ

て？(優花に) 親父を轆き逃げした犯人が自首してきたそうだ。

岩代 本当ですか？

仁一 (スマートフォンに向かって) ……その人の名前には覚えがありません。…

…うちの会社の元社員ですか。…二十四年前にリストラされた？ ……父

が映画に出ることを知って、許せないと思った？ ……わかりました。じゃ、

詳しい話はその時に。

あなた。

優花 仁一さん、あなたを疑ったりして、すみませんでした。

若菜 (ベッドに歩み寄り) お父さん、あなたはたくさんの敵と戦っていた。僕は

仁一 この身を挺して、あなたを守るべきだった。それなのに。お父さん、申し訳

ありませんでした。(頭を下げる)

浦神・岩代・仁一・優花・道成寺・箕島が去る。

若菜 仁一さんは何もしてなかった。全部、私の思い過ごしだったの。

有田 いや、全部ってことはないんじゃないか？

若菜 何が言いたいのか？

有田

若菜

有田
若菜

どう考えても、植木鉢の件は不自然だろう？ あれは、やっぱり、仁一さんが落としたのかもしれない。浦神さんが階段から転落した件も、仁一さんが関わっていたのかも。浦神さんを憎んでたって、本人が言ってたじゃないか。でも、今の気持ちは違うと思う。実際に何があったのかはわからないけど。わからないままでもいいんじゃないかって思ったんだ。そうだな。何をやっても、浦神さんは戻ってこないんだ。次の日。つばき食堂が予定通りにオープンして。

② 八月二十七日夜、レストラン。邦子・洋恵・勝が椅子に座っている。

洋恵

勝

有田

若菜

邦子

若菜

勝

洋恵

勝

洋恵

勝

邦子

勝

あー、疲れた。勝、ちょっと足揉んでよ。ふくらはぎが痛くって。イヤだ。俺だって、クタクタなんだ。

あれ？ どうして勝くんがここにいるんだ？ あんなに反対してたのに。他に人が見つからなくて、おばさんが呼びつけたの。

勝くん、若菜、手伝ってくれてありがとう。おかげで助かった。

今日はいいとして、明日からどうするの？ アルバイトの当てはあるの？ 俺、授業のない日なら、手伝ってもいいけど。

就職活動はどうするのよ。就職はしない。大学院に行って、研究を続ける。

何ですって？ やりたいことがあるんだ。でも、なかなか決心がつかなかった。

勝くん、何の研究してるんだっけ？ 航空工学です。俺、宇宙飛行士になろうと思ってます。

洋恵 宇宙飛行士？ 何、夢みたいなこと言ってるのよ。
勝 母さんには言われたくない。おばさんにも。
有田 勝くん、優秀だったんだ。メチャクチャ意外なんだけど。
若菜 お母さんたちが働く姿を見て、自分も頑張ろうって思ったんだって。

そこへ、日出男がやってくる。リボンのついた簀の子を持っている。

日出男 勝、なぜおまえがここにいる。(背中に簀の子を隠す)

勝 母さんに呼ばれたんだよ。父さんこそ、何しに来たんだ？

邦子 私が頼んだの。十分にいいから、顔を出してって。

洋恵 また余計なことを。待って。ヒデくん、その背中からはみ出してる物は何？

日出男 見てわからないか？ 簀の子だよ。君が使うには、シンクが高いって言って

ただろう。これを足元に敷けば、少しはマシになるかと思つて。

洋恵 それで、わざわざ持ってきたわけ？

若菜 おばさん、助かったじゃない。これで、足が痛くならずに済むよ。

日出男 (洋恵に) 実は、明日、スリランカへ行くことになったんだ。

邦子 明日？ そんな話、聞いてないよ。

日出男 今日、急に決まったんです。だから、その前に、これを渡したくて。

洋恵 あ、そう。一応、ありがとう。(受け取る)

邦子 何よ、その言い方は。

日出男 それじゃ、みなさんもお元気で。

日出男が去る。

若菜 おばさん、何してるの。早く追いかけて。
洋恵 別にいいよ。

すぐに日出男が戻ってくる。

日出男 (洋恵に) なんで止めないんだよ。普通だったら、止めるだろう。

勝 止めてほしいなら、出ていくなよ。

日出男 忘れ物だ。

洋恵 何？

日出男 開店おめでとう。いい店になることを祈ってる。じゃ。

洋恵 待ちなさいよ。お腹は空いてないの？

日出男 空いてたら何なんだ？

洋恵 賄い、食べていってよ。一人分ぐらい増えても、何とかなるから。

邦子 (日出男に) そうしてそうして。準備があるとは思うけど。

日出男 準備って？

邦子 明日の準備よ。スリランカに行くんでしよう？

日出男 ええ、まあ。でも、そんなに早い飛行機じゃないんで、大丈夫です。

勝 父さん、もうやめよう。俺、耐えられないよ。

洋恵 何のこと？

勝 ごめん、母さん。

若菜 どうして勝くんが謝るの？

勝 父さん。

日出男 洋恵 日出男 有田 日出男 勝 洋恵 邦子 日出男 洋恵 若菜 日出男 洋恵 邦子 日出男 邦子 日出男 洋恵

（洋恵に）ごめん。海外赴任の話は、勝と考えた、でっち上げだ。は？

それぐらい大袈裟にしないと、君の気持ちは変わらないと思ったから。マジか。

（洋恵に）本当にごめん。みなさんも、すみません。

（同時に）すみませんでした。

信じられない。馬鹿じゃないの、親子揃って。

でも、日出男さんは、認めてくれたんでしょ？ お店のこと。（實の子を示して）だから、これを持ってきてくれたのよね？

そういうことです。でも、ただ持ってくるんじゃないと思っ

て。

だから、明日行くなって言ったの？ 馬鹿みたい。

馬鹿馬鹿言うな。大体、君が悪いんだぞ。黙って出ていったりするから。

ストツプ。お願いだから、普通に仲直りして。

（日出男に）どうしてもっと早く認めてくれなかったのよ。結婚する前、私

が、いつか独立したいって言ったたら、「僕が最初の客になる」って誓ったク

セに。

二十年以上も前の話を持ち出すなよ。代わりに、一番の常連になるから。

ありがとう、日出男さん。

ただし、無理はしないって約束してください。絶対に。

わかった。約束する。

ヒデくん、賄いが食べたかったら、洗い物手伝って。勝、あんたもよ。

邦子・洋恵・日出男・勝が去る。

有田 台風みたいな親子だな。

若菜 後でおじさんが言った。もし、本当に転勤の話が来ても断るって。

有田 どうして？

若菜 お母さんに何かあった時、すぐに駆けつけたいからって。おじさん、中学生の時に、お父さんが心臓の病気で亡くなってるんだ。病気がわかったのはお父さんが倒れた後で、おじさんには何もできなくて、本当に悔しかったんだって。

有田 そうか。それで、あんなに反対したんだ。

邦子が戻ってくる。

邦子 若菜。あなたも一緒に食べる？

若菜 お母さん、体の調子は？ 疲れてない？

邦子 私は平気よ。あなたはどうかなの？ 昨夜は、ほとんど寝てないんでしょう？

若菜 大丈夫。動いてた方が、気が紛れるから。

邦子 若菜。浦神さんのことは、本当に残念だと思う。でも、自分の体も大切にしないよ。

若菜 お母さんこそ。

邦子 こういうことって、何度経験しても慣れないよね。でも、浦神さんと、もう一度話ができて嬉しかった。ありがとうね。

若菜 お母さんが知ってる浦神さんとは違ったって言ってたよね。

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

邦子

若菜

話し方も、表情も、全然違ってた。私のこと、忘れたんじゃないか、最初から知らないみたいだった。体は浦神さんでも、中身は別の人なんじゃないかって疑ったぐらい。

あの人も、同じことを言ってた。自分は浦神さんじゃないって。どういうこと？

本当の自分は、天使の手違いで死んだ。だから、浦神さんのことは何も知らないって。

違う人の魂が、浦神さんの中に入ってたってこと？

そんなこと、信じられる？
有り得ないって言いたいところだけど。もしかしたら、とも思う。本当に？

若菜はどうなの？ 浦神さんが、嘘をつくような人だと思おう？
わからない。まだ、知り合ってから一カ月も経ってないし。

悔しいな。やっと、晴れるんじゃないかと思っただけ。

何のこと？
三年前、辛い思いをしてから、若菜の心にはいつも雨が降ってたよね。でも、浦神さんと仕事をするようになって、晴れ間が見えたような気がしたの。

もつと浦神さんと話をすればよかった。こんなに早く、会えなくなるなんて思わなかった。

若菜。
浦神さん、また会いに来るって言ったんだ。それも信じたかったのに。

若菜が俯く。邦子が若菜を抱き締める。二人が去る。反対側へ、有田が去る。

①九月一日夕、スタジオ。スタジオ前の廊下。岩代がやってくる。スマートフォンで話をしてる。

岩代

：：はい、岩代です。：：はい。それはもう、白浜も承知してます。：：はい、ざつと一カ月は。：：わかりました。本人も喜ぶと思います。これから、ちょうど会いますんで、伝えておきます。：：はい、失礼します。

岩代が電話を切る。そこへ、若菜がやってくる。

若菜

あれ。旭くん、どうしたの？

岩代

おまえを待ってたんだよ。スタジオに行くってメール、読んだから。

若菜
岩代

それでわざわざ？
一応、俺が担当だからな。それで、今、下里部長から電話があつてな。浦神

さんの本、正式に打ち切りが決まったんだ。でも、安心しろ。若菜が取材にかけた時間のギャラは、ホテル側が払ってくれるってさ。よかったな。で、

若菜

今日の夜に行つて。お疲れ会をやるかい？俺が奢るから、二人でうまいもの食いに待って。お疲れ会は、取材が全部終わってからにして。

岩代 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜 岩代 若菜

どういうことだ。今日は最後の挨拶に来たんじゃないのか？

全然違う。「これからも取材を続けますので、よろしくお願いします」って
言いに来たの。

つまり、おまえは続きを書くつもりなのか？ 俺は反対だ。

どうしてよ。

結局、浦神さんは六日しか撮影に参加しなかった。その間に撮影したシーンは、全部代わりの役者で撮り直すことになった。そんな人の本を書いて、一体誰が読む？

それは私の書き方次第よ。私は浦神さんから大切なものを受け取った。それが文章にできれば、きつとたくさんの人が読んでくれる。

おまえがそう思うのは、浦神さんの死が受け入れられないからだ。
違う。

そうじゃなければ、浦神さんに対して、過剰な思い入れをしているからだ。

おまえは浦神さんが好きだったんだ。

そうよ。私は浦神さんが好きだった。だから、浦神さんの本を最後まで書き
たいの。それでいい？

あー、もう、わかったよ。俺が何を言おうと、おまえの気持ちは変わらない
んだな？

そういうこと。

だったら、俺ももう口出ししない。おまえの気が済むようにすればいい。

ありがとう、旭くん。

礼なんか言われる覚えはない。

でも、あなたがいないなかったら、私はきつと途中で挫折してた。原稿が書き上

岩代 岩代 若菜 若菜 岩代 岩代 若菜 若菜 岩代 岩代

がっつたら、読んでくれる？
当たり前だ。誰よりも先に読ませろ。ガンガンダメ出ししてやる。
お願いします。じゃ、私はスタジオへ行くね。

若菜 何？

困ったことがあったら、いつでも電話しろよ。相談に乗るから。
うん。

俺はおまえの幸せを願ってる。誰よりも。それだけは忘れないでくれ。
ありがとう。
じゃあな。

② 岩代が去る。
二時間後、隣のスタジオ。有田がやってくる。

有田 お疲れ様です。
若菜 あの、すみません。今、中に入っても大丈夫でしょうか？
有田 というふうには、僕に会ったんだね？ 今から一時間五十分前に。
若菜 そう。感想は？
有田 驚いたな。君と浦神さんの間に、そんなことがあったなんて。一応聞くけど、
若菜 全部、本当なんだよね？
有田 百パーセント、本当。嘘なんかついてない。
若菜 ええと。つまり、こういうことか？ 浦神さんは、本当は浦神さんじゃなかった。中身というか、魂は、天使の手違いで死んだ、新宮弘樹だったと。

若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田

この五日間、私は新宮さんについて、徹底的に調べてきた。串本さんにも話を聞いた。新宮さんは、串本さんと同じ大学で、同じ演劇サークルだったの。へえ、そうなんだ。

二人は十二年前、大学三年の時、串本さんが書いたお芝居を上演しようとした。でも、主役をやるはずだった先輩が出演を拒否して、直前で中止になった。今、あなたが出てる映画は、そのお芝居が元になってるの。

もしかして、小野田の役は。十二年前、新宮さんがやるはずだった。串本さんが、新宮さんのために書いた役だったのよ。

だから、オーディションを受けたんだね。どうしても小野田がやりたくて。そう。あなたと同じよ。ちよつと待ってくれ。まさかとは思うけど、白浜さんは、僕の中身が新宮さんだつて言いたいの？

最後まで聞いて。私は新宮さんの写真も見せてもらった。そしたら、私のよく知ってる顔だった。パン屋のお客さんだったのよ。君のバイト先の？もしかして、玉子大好きタマさん？

そう。有田さん、言ったよね？私の顔に見覚えがあるって。あれは嘘？嘘じゃないよ。でも、僕は僕だ。有田恒彦、三十三歳。五日前まで、警視庁東新宿署の刑事課に所属してた。

え？あなた、刑事だったの？そうだよ。疑うなら、後で一緒に確かめに行ってもいい。刑事がどうして役者になろうと思ったの？

テレビで浦神さんが亡くなったことを知って、だったら僕がやるしかない

若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田

思ったんだ。

その前に、何か変わったことはなかった？

変わったことって？

階段から落ちたとか、自転車ごと車にぶつかったとか。五日前の朝か、六日前の夜に。

六日前の夜に、容疑者と格闘中に、マンシヨンの五階から転落した。

五階から？ それで、怪我はしなかったの？

見ての通り、無傷だった。でも、自分の刑事としての能力に限界を感じて、これからは役者として生きていこうと思つて。

あなたがマンシヨンから落ちたのは、六日前の何時頃？

午後十一時ぐらいだったかな。

浦神さんが亡くなったのは、六日前の午後十時過ぎよ。知ってた？

いや、正確な時間までは。

こうは考えられない？ 有田さんはマンシヨンから落ちて、死んだ。そこへ、一時間前に浦神さんの体から抜け出した新宮さんの魂が入った。

僕は死んでない。

マンシヨンの五階から落ちて無傷だったなんて、絶対におかしい。

僕は高校時代からボクシングで鍛えてるんだ。

ボクサーだって、五階から落ちたら、骨の一本や二本折れるでしょう？ それに、突然、役者になろうって思つたのも変。浦神さんの後を継ごうと思つたのも変。

変じゃない。誰にだって、突然の閃きはある。

その閃きはなぜ起きたの？ 有田さんの体に、新宮さんの魂が入ったからじ

有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜 有田 若菜

やないの？

でも、僕には新宮さんの記憶はないんだ。

じゃ、あの言葉は？ 玉子の殻を割らなければ。

玉子焼きは食べられない。この言葉は、昔から僕のモットーみたいなもので。

思い出して、新宮さん。あなたは、本当は新宮さんなんでしょう？

僕は有田だ。新宮さんじゃない。

絶対に会いに来るって言ったじゃない。僕は嘘をつきませんで。

僕は言っていない。そんな記憶はないんだ。これっぽっちも。

：：：そう。

ごめん。期待に沿えなくて。

私こそ、おかしな話をしてごめんなさい。撮影、頑張ってくださいね。

あの、今度、君のバイト先に行ってもいいかな。

どうして？

六日前の夜、僕は突然、役者になりたくなくなった。それともう一つ、変わったことがあってね。玉子が入ってるパンが大好きになったんだ。

若菜が驚く。有田がうなづく。二人が歩き出す。